

失蹤宣告

京都家庭裁判所は下鴨神社の南端に位置する。敷地には古木が林立し、神社から続くその密生は糾ノ森と呼ばれている。その名の所以は、そこがかつて処刑場であったことによる。また辺りは、西の加茂川と東の高野川が、京都を南北に貫く鴨川へと一本に合流する地点でもある。しかし、たしかに川の流れから見ればそれは合流であるが、南側の今出川橋から見れば、出町三角洲が楔のように鋭く鴨川に食い込み、川を真っ二つに裂いているようにも見える。その奇観は誰の目にも強い印象を与える。和合ではなく、背き合い引き裂く断裂であり訣別の情景である。

人々は加茂川にかかる葵橋を渡って、家裁の門をくぐる。葵橋はむしろ青い橋。ブルーブリッジ、悲しみ橋であると囁かれる。糾ノ森が処刑場であったならば、なるほどそれは涙橋であったかもしれないからだ。

私とその失踪宣告事件の調査に着手したのは、はじめじめと鬱陶しい雨模様が続くまだ六月で

あった。

失踪宣告は対立する親族間紛争を含まない甲類審判だ。骨の髄まで染み込んだ血をめぐる愛憎の情念が世代をまたがり、熾烈な重経緯で紛争をこじらせ、私人間の解決がもはや困難となった多くの家裁で扱う案件に比すれば、その終結への道筋は単純である。親族が失踪宣告を家裁に申し立てれば、家裁は事件本人すなわち不在者が七年を越えて生死不明の状態であると認められるか審理したのち、審判によってその失踪宣告を決定する。それから一定の公告期間に生存の申し出がなければ、不在者は法律上死亡したと見なされる。

通常、人の死は医師の死亡診断書によって証明される。ところが医師による証明が不可能な場合に、裁判所が法的な死を宣告という手続きである。

家裁調査官である私の任務は、不在者の生存情報の有無を過去に遡って調査することになる。

申立人は池山修三、アパート経営、五十二歳とある。不在者はその妻池山玲美、職業欄は空欄で、失踪当時三十三才とある。申立書には、池山の自筆によるその趣旨が記されてあった。

「当時の私の妻の池山玲美は平成二十年頃、宇治市の天ヶ瀬ダムで自殺しましたが、死体が上がらず、そのまま十年がたちましたので、失踪宣告をお願いします。」

家裁窓口で職員に手助けされつつ記したのだろう。字を書きなれない筆致に見えた。

私の調査呼出に応じて家裁に現れた申立人は小柄で貧相な印象を与える男性であった。

「はじめまして、あなたが申し立てされた失踪宣告事件を担当することになった調査官の森村圭史と言います。よろしくお願いします」

私が自己紹介すると、申立人池山は少しおどおどした態度で頭を下げた。自営業らしく、着古した薄地のジャンパー姿だ。

全体の手続きの流れを説明したあと、私は今回申し立てに至った動機や経緯を尋ねた。すると池山は勢い込んで自ら語り始めた。

「もう十年も前のことやさかい、普段はもうとつくに忘れてしもたことやねんけど、今度長男が小学校に入りますねん。そんで、いつまでも中途半端にしとったらあかんの違うかと嫁に言われて、へえ、なんとかならんもんかと区役所に相談したら家庭裁判所で手続きしてくれますさかい行きなはれ、言われたんですわ。これ、春までになんとかなりまつか？」

口を開くと一気にまくし立てた。

つまり彼はその後別の女性を事実上の妻と迎え、誕生した子供が入学するのを機に正式に婚姻関係を結びたいと考え、先回の婚姻を解消する失踪宣告を申し立てたのだ。

報道などでよく目にする、行方不明とはこういうことだ。たとえ状況から死亡が強く推定されても、その遺体が見つからなければその人が死亡したと無碍に断定はできない。法的な婚姻関係は継続するから、そのままでは再婚もできない。残された者に強いられる枷である。また一方では、遺体が発見されない限り、思いがけずどこかで今も生きているのではないかという一縷の可能性にすぎるのが残された者にとって許されるせめてもの切ない希望とも言えるのである。

それにしても、申立人の語り口の軽さは印象的であった。ごく身近な伴侶を不意に喪失した混乱の痕跡は感ぜられない。多くの場合どのように歳月を重ねようとも、その傷口は生々しく即座に蘇るものである。やはり十年余という歳月が圧倒的な力で衝撃を過去へと消し去ったということだろうか。

私は今回の調査の中心となる不在者が生死不明の状態となった状況、つまり彼の妻の自殺について話を振った。

彼は少し困った様子で口を開いた。

「とにかくもう昔の話やさい、そもそも私は何も知らへんのですわ。帰って来てへんよってに、捜索願いを出したら、ダムで自殺した女が、その、玲美、とちゃうかと。多分、そうやと

いうことになりましたん」

もう長い間その名を口にするのもなかったからか。不在者の玲美という名を彼は言い淀んだ。

「自殺をはかった方が玲美さんではないかと推測された、その理由はどういうことだったのですか」

「なんやったんやろなあ。わし、あほやし思い出せへんわ」

そう言って屈託ない笑顔を見せる。

「何か、当時の新聞記事とか資料となるものをお持ちくださいましたか」

面接の通知に資料の持参をお願いしていた。

「それが全部ほかしてしまいましたん」

悪びれずけろつと言う。

「それは困りましたね。ではともかく玲美さんがいなくなった日時を特定しましょう。資料がないとなると、とりあえずは池山さんの記憶が頼りになりますから、よろしくお願いします」

「面倒かけますわ」

全体、他人事のような池山の態度であった。

面接を終え、私は池山の話を整理した。

玲美が失踪した時期については、ちょうどお気に入りのプロ野球チームが十三年ぶりにリーグ優勝した年であると彼は思い出した。優勝がペナント終盤までもつれ込み、マジック点灯後、その勝敗に一喜一憂していた時期のことだったと言う。時期については、これで大体的に見当はつく。

捜索願を出した経緯についてはひどく記憶が曖昧だ。おそらくは住所地を管轄する伏見警察署に届け出たのだろう。

ダム湖への自殺を捜査したのは宇治警察署である。自殺者は玲美に間違いないと警察署で聞いたと池山は言うが、その根拠は不明である。

地元の地方新聞に小さく自殺の記事が出た記憶があるが、他紙であったかもしれないのと。と。

なんとも心もとない。事実上再婚してもう長い間その後の人生を送っているとは言え、情報があまりに乏しい。通常はもう少し手がかりがあるものである。

ともかく公機関等に問い合わせ、その資料で失踪の事実を固めねばならない。私はその日の

うちに警察署に照会書を送付した。そして、ダムと新聞社に電話して問い合わせたが、ダムにおける事故については所管の省庁にも詳細な記録は残されておらず、また新聞については図書館等で調べるほかないとけんもほろろの対応であった。

私は他に大きな事件をいくつも抱えており、甲類審判事件に過大な時間を割く訳には行かなかった。照会書の回答を待つことにした。

二週間と待たず、警察署から回答があった。

池山は妻の搜索願など出してはいなかった。当時彼は妻と別居中で愛人宅に身を寄せていたため、警察がようやく彼に連絡が取れたのは、自殺事故からなんと十日後のことであった。そしてそれは、彼が自信ありげに語った球団優勝の年ではなく、その前年のことだ。

玲美が十一年前の平成十九年十一月五日に天ヶ瀬ダムに転落したことについては警察の記録で明らかであった。転落者の身元については、そのとき玲美に同行していた男性の目撃証言と遺留品によって証明されている。加えてダムに勤務する警備員の目撃証言もあったという。最終的に、事件性のない自殺事案として処理されている。

玲美に同行していたという男性からの聴取書類は添付されていなかったため自殺の詳細な状

況は不明であるが、捜査資料により不在者が十一年に渡り生死不明となっている事実については公的に証明されている。失踪宣告事件の調査としてはこれで足りると私は判断した。また、自殺現場に居合わせたという同行男性の名が、一昨年京都家庭裁判所を退官した佐伯隆博裁判官と同名同名であることに気づいたが、特段稀な名でもない。偶然の一致と受け流し、私は特段気に留めることもなかった。

資料によれば、事故当日は台風の接近による豪雨であったという。そのため数日暴風雨が続き、警察による捜索は見送られている。ようやく天候が回復しても増水によるダムの放流措置へと続き、不在者の捜索が行われたのはなんと五日後である。その捜索もわずか二日で打ち切られている。

無残である。事故であればいかにも無念であろうと想像するが、覚悟の自死であればどうだろうか。

それにしても豪雨の中、その現場に二人で訪れたとはどういうことだろう。そもそも二人はどのような仲だったのか。思わず想像をめぐらせてしまいが、それは調査すべき対象ではない。知る必要のない事柄である。

私は早々に報告書をまとめ、担当裁判官に提出した。

裁判官から呼ばれたのは数日後のことだ。私はてっきり、調査が長引いている別件親子関係不存在確認事件の進捗についてであろうと判事室へ赴いた。

「森村さん、この事件だったんですね」

家事部の部長裁判官は件の失踪宣告事件の記録を目の前に置いていた。少し戸惑っている私に、部長は言葉を続けた。

「佐伯さんから聞いていたんです。彼は自分で決定を出したくて、わざわざ京都家裁に転勤してきたんですよ」

警察の回答にあつた佐伯隆博とは、やはり佐伯裁判官のことだったのだ。

「二回です。最初は刑事部の懇親会の席で聞きました。あともう一度は退職の送別会の席です。お酒が入っていましたが、自分が担当せねばならない失踪宣告事件が当庁にやがて申し立てられるはずだと言うのです。とても奇異に感じて記憶に残っていました」

返答もできずにいる私にかまわず、部長は机の上の事件記録をすつと私の方へ押しやった。

「すみませんが、警察署から佐伯さんの供述を取り寄せてください。むずかしければ、裁判官名で照会しても結構です。そして必要であれば、佐伯さんに面接調査していただくことになる

かもしれません」

ただならぬ心配を私は察した。

「あと、不在者は少年部に事件係属しているのではないかと思えます。当たってみてください」

「わかりました。追加の調査にかかります」

「よろしく願います。この件については首席調査官を通じて、あなたの主任にも伝えますからあなたからの報告は無用です」

部長は表情を変えず席を立ち、執務机に戻った。私は重い緊張を覚えながら、判事室を出た。

異例である。失踪宣告事件の調査としては私の報告で足りるはずであったし、普段であればよりフランクに調査官とのカンファレンスを楽しむ部長である。私からの質問を拒んでいるかのようなその態度は、何も言えない、と部長自身が沈黙のうちに告げているのだと思えた。

私はその足で少年訟廷事務室に赴き、玲美の係属歴を調べてもらった。

記録によると、不在者旧姓矢部玲美は京都家裁に虞犯事件で係属しており、女子少年院送致の決定を受けている。そして、その審判を担当したのは佐伯隆博判事であった。

警察署から、申述書の写しが届いたのは一週間後のことだ。

「私こと佐伯隆博は、現在大阪地方裁判所第四民事部で裁判官をしている特別国家公務員であります。

本日平成十九年十一月五日、池山玲美（京都市伏見区橋本町三二の二ハイツ橋本五一四号室）さんが国土交通省近畿地方整備局管理に係る関西電力天ヶ瀬発電所ダムの北側通称ダム湖に転落した経緯についてお話します。

先に私と池山玲美さんの関係について説明します。私と池山玲美さんとは長年にわたる交際期間のある親密な友人で、継続的な肉体関係を有するいわゆる愛人関係にあります。私は未婚であります。池山玲美さんが既婚者であることは私も承知しております。

私と池山玲美さんはかねてから約束していた通り、同年同月四日に京都市下京区で待ち合わせ、同区内の中華料理店で食事を一緒にとった後、同市北区のラブホテル『サンセット都』にて宿泊しました。池山玲美さんの様子に特段変わったところはなく、いつも通りに私とも良好な交歓の時間を持ったのであります。

翌日同年同月五日は日曜日でありましたから、一日を二人で過ごそうと話し合いホテルを出

たのですが、前日からの雨がいよいよ激しくなり、私たちは自動車を市宮御池地下駐車場に停めると、同市下京区のアーケード街通称寺町商店街でショッピングなどしております。

同商店街のレストラン『リプトロン』にて一緒に昼食をとった後、池山玲美さんは突然、ダムが見たいと言い出し、私たちはそれから、宇治市の天ヶ瀬ダムに向かったのです。

実は私自身がダムマニアと称されるダムの愛好家で、天ヶ瀬ダム含めさまざまなダムにこれまで池山玲美さんを連れて見学に行ったことがありました。そのため、私は池山玲美さんのダムに行きたいという提案に二つ返事で賛同したのです。

大型の台風が九州北部に上陸しており、天候は大変な豪雨で、注意報が発令されていたとあとで知りました。同日午後二時四十五分ごろ、私が運転する私所有の乗用車（京三九八お四八一五）にて天ヶ瀬ダムに到着しました。

普段であれば、見学の観光客があるのですが、豪雨のため私たち以外誰も見学者はおりませんでした。

ビニール傘が一本しかありませんでしたので、私たちは身体を寄せてひとつの傘で豪雨をしるぎ、ダムの頂上に当たる幅十メートル程の見学通路を歩きました。

愛好者以外には理解が難しいかもしれませんが、ダムの醍醐味は増水にあります。危険では

ありますが、台風時のダムは言わば愛好家にとって垂涎の的なのです。私は豪雨の中増水したダムに興奮し、『すごい。すごい。』などと言って、南側の手すりから身を乗り出して景色を覗いていたのであります。

そしてふと気がつくと、池山玲美さんが傘から出て、土砂降りの雨の中にずぶ濡れで立っておりました。驚いて、どうしたんだと私が大声で尋ねましたところ、口を開き何かを答えたのですが、聞き取れませんでした。

傘を高く掲げて、早く傘の下に入れと私が手招きすると、池山玲美さんはその場から私と反対側の北側の手すりの方へ歩き出しました。

私は慌てて駆け寄り、池山玲美さんの腕をつかんだのですが、私の腕を振りほどき、彼女は鉄棒に上がるように飛び跳ねて、高い手すり柵の上にまたがりました。

驚いて、私は彼女を引きずり下ろそうと腕をつかんで引っ張ったのですが、強い力で私の手を振り払い、そのまま姿が消え、彼女はダム湖に転落して行きました。

私は動転し、手すりから顔を突き出して『玲美！玲美！』と大声で叫び、呆然としてその場にしゃがみこんでおりました。そのとき、ダムの警備員の方が駆け寄ってきて、警察と消防に電話した、と伝えてくれたのです。

以上が、本日午後二時五十分頃池山玲美さんがダム湖に転落した経緯であります。

法によって人を裁く立場にありながら、婚姻中の女性に不貞行為を強いる交際をしていたことは深く反省しております。そしてその理由はまったくわかりませんが、私の目の前で交際女性が自殺をはかり、それを止めることができなかつたことに悔やみ切れない後悔を今抱いています。

平成一九年十一月五日 佐伯隆博

以上読み聞かせ、内容に誤りがないことを確認の上、本人が署名指印した。」

「私は関西電力天ヶ瀬発電所ダムにおいて非常勤の契約社員として管理棟警備の勤務に就いている者です。

本日私が目撃しました若い女性の転落事故についてお話しします。

私が管理棟内の定時巡回を終えて詰所に帰ってきたとき、ガラス窓越しにダム頭頂通路中央部で大変な豪雨の中、なにやら二人の男女が傘もささずもみ合っている様子であるのに気づきました。それから女性が北側手すりにもたれ寄りかかり、男性がそれをとどめようとしているようでありました。これはただならぬ危険な状況だと、私もすぐその現場に駆けつけねばと、

常備してある雨合羽をロッカーから取り出しました。合羽のズボンをはき終え、上着の袖に腕を通しながら、もう一度ガラス窓越しに見ると、すでに女性の姿はなく、男性が手すりから身を乗り出してダム湖をのぞいておりました。遅かったかと思いつながら、私はすぐに、消防と警察に緊急電話を入れ出動を要請してから、男性の下に駆けつけました。女性ものの靴が近くに転がっており、男性は大変興奮し混乱しておりました。うづくまっては顔を抑え、目を真っ赤にして大声を上げ泣いておりました。

転落の瞬間は見ておりませんが、前後の状況から女性が男性の制止を振り切ってダム湖に転落したことに間違いありません。

平成一九年一月五日 黒崎九州男

以上読み聞かせ、内容に誤りがないことを確認の上、本人が署名指印した。」

聴取書を読み終えると、私は渡り廊下を抜けて西棟少年部の調査官室に向かった。玲美の虞犯事件を担当した渡辺調査官と話をするためだ。

大きな窓を背に渡辺は執務椅子に座っていた。その横に、私も窓ガラスを背に腰を下ろした。

「よお、どうした」

渡辺が尋ねる。

「相変わらずここは陽がきついな」

「ああ、家事部と違って、直に直射日光あたるからな。もうちよつとすると西日地獄だ」
少し二人黙っていた。

そして渡辺が声を落とし、口を開いた。

「矢部玲美の前歴調べてたんだろ。家事で面倒な事件かかっているのか。家事事件の調査に少年時代の係属歴なんか普通関係ないだろ」

私は渡辺の問いを無視して、尋ね返した。

「矢部玲美、覚えてるのか」

「ああ、美少女だ」

「虞犯の中身は何だったんだ」

「売春だが、それは形式上だ。十八で若頭の女になって、抗争相手の組に拉致されて、シャブ漬けにされていたところを警察に保護されたんだ。被害者みたいなものだが、境遇がひどすぎたから、保護するには警察も立件するほかなかったんだ」

私は立ち上がり、窓の外を眺めた。夏の太陽が雲の間から鋭い光を発している。

「帰せば、両方の組が待ち構えていたし、恐喝と覚醒剤の余罪もあったから、京都から引き離さないとうとうもなかった。丸亀に送ったが、とにかく矢部は一人だったからな」

「担当裁判官は佐伯さんだったのか」

「ああ、佐伯さん若かったし、見てられないほど悩んでいたな」

太陽が雲に隠れた。灰色の雲間にオレンジがにじむ。立ったまま私は眺めていた。

「佐伯さん、修習生のとき矢部の審判に立ち会っていたんだ。だから少年に思い入れて、距離の取り方が分からなかったんだな。あんなに動揺していたくせに、審判はひどく冷たかった。怒っているのが僕にも書記官にも分かった。涙目になって、矢部を睨みつけてた」

渡辺も席を立ち、私と並んで窓から外を眺めた。

「矢部は？」

ん？と意味がわからず一瞬間を置いてから、渡辺は口を開いた。

「ああ、すごい顔でジャッジを睨み返していたよ。飛びかかるんじゃないかと心配して、本気で身構えてたよ。なんか、凄まじい法廷だったな。あんな審判、十年に一度あるかないかだ。判事の説諭も少年側の抗弁もなくて、むしろ審理は事務的だったのに、緊迫感なんてもんじゃ

なかった。張り詰めた沈黙でキリキリ胃が痛くなりそうだった」

「それから玲美に再犯はなかったのか」

「聞いてない。すぐ成人年齢になったんじゃないか」

私はしばらく沈黙したあとで、胸を反らして肩を回し身体をほぐすと、大きく息を吐いた。

渡邊は黙って私の肩をポンと叩くと、口調を変え、一段高い声で言った。

「佐伯さん、元気でやってるかなあ」

「ああ、和歌山に帰って弁護士やってるんだろ」

「会うのか？」

「たぶん」

「よろしく言ってくれよ。なんかよくわからない退官だっただろ。ろくに挨拶もできなかったからな」

雲に隠れ、もう太陽は姿をあらわすことはなかった。

比較的短期の調査で終わる予定であったのに、一步外に出ればどっと汗ばむ猛暑の季節となっている。祇園囃子の時季だ。いよいよ京都の夏はますます容赦のない暑苦しさが続く。

「森村さん、他の事件で忙しいところだと思うけれど、もう少しこの事件の細部を調査していただけますか」

部長裁判官はそう言った。

「佐伯さんに会って話を聞いてくればいいですか」

「不在者の自殺の際の様子を、申述書のとおりであるかどうか、調査お願いします」

私は、尋ねてみた。

「他に何か調査で明らかにすべき事項はありますか。部長が特に何か気にしておられることがあるのであれば、それを伺っておかないと的外れな調査報告をしてしまいそうです」

部長は黙っている。そしてようやく口を開いた。

「佐伯君はもう裁判所を去った人だけけれど、そうそう割り切ることはできないということなんです。」

彼は大阪地裁の民事部から何年もかけ、たつての希望で京都家裁家事部に配属となった。もちろん表向き理由は別ですが、それはやがて申し立てになる失踪宣告を自分の手で審判したいというのがその理由です。もちろん一裁判官の恣意で事件担当が決まることなどありえないことですし、ましてや自分が事案の関係者であるなら、担当から外れるべきだと自分から申し

出るべきでしょう。ですから、彼の態度は裁判官としてはとても異様です。またそれを秘すのではなくわざわざ私に知らせたというのも奇異です」

部長は続けた。

「ずっとこの事件の申し立てを待っていたが、七年を経過しても申し立てはなかった。もう待ちくたびれたのかもしれませんが。彼は去りました」

沈黙が流れる。私は尋ねた。

「自分の手で審判したい、と佐伯判事が思われた理由について、どのような仮説が成り立ちますか、裁判官としては」

部長は少し笑みを浮かべた。

「それは裁判官であろうがなかるうが、人に渡したくない、という心理に変わりはないと思います。その動機については、調査官の方が我々よりも専門でしょう」

そう言うてから、いつもの表情に戻った。

「警察が捜査を打ち切ったとは言っても、不在者が自殺して失踪したという事実はずっとこの佐伯さんの供述にしか根拠がありません。そして彼は自分の手で審判することにこだわっていた。この事件を担当できるのは自分だけだと矜持のようなものを抱いていたのかも知れない

が、多くの場合、人に見られたくない、知られたくない事情があったのでしよう。それが単に不倫行為を秘匿しただけだったのか。それだけならよいのですが」

言葉を止め、部長は私を見た。

「森村さん」

「はい」

「私は警察で佐伯君が語った供述は事実とは異なるのかもしれないと考えています」
部長はぼそりと、そう踏み込んだ言い方をした。

「和歌山弁護士会でしようか。いつもお世話になります」

「いよいよ佐伯さんと出会う日程を調整をするため、私は佐伯さんの連絡先を弁護士会に電話で問い合わせた。」

すると思いもよらない返答が帰って来た。

「佐伯隆博先生の登録は抹消されています」

「登録替え？ まさか懲戒ですか？」

私は驚いて尋ね返した。

「いいえ、懲戒でもありませんし、他の弁護士会に登録されたとも聞いておりません。弁護士を廃業されたのではないのでしょうか」

「廃業？」

思わずそのまま返した。まさか。

「こちらを一昨年退官されたのですが、一旦はそちらに登録されていたということですね？」

「はい、一昨年の春ですね。登録されています。しかし、今年の二月にご自分から登録抹消を手続きをされています」

「佐伯さんの現住所はわかりますか」

「それはお答えできません」

「登録されていた事務所の住所はわかりませんか」

「申し訳ありません。もうこちらの会員ではありませんから、電話ではお答え致しかねます」
どうしたのだろう。私は途方に暮れた。もう佐伯さんが和歌山にいるのかさえ不明なのだ。

私は彼がまだ和歌山にとどまっていることを期待して、すぐ市役所に住民登録の照会をした。

午後五時を過ぎれば、庁舎のエアコンは停止する。執務室の大きな窓を開け放すと、網戸の外は糾ノ森だ。鬱蒼とした木々から蝉の鳴き声が押し寄せるように幾重にも重なり、けたたましいほどに響く。

すぐに部屋は熱気で満たされる。じわじわと汗ばんでくる。

私は、相当難儀であった親権者変更事件の調査報告書をようやく書き上げると、よし！と自分で声に出して、大きく伸びをした。私同様、居残って書類の山と格闘している同僚と目が合い、思わず笑みを交わす。いつのまにか、もう七時を過ぎていたが、外はまだ明るい。

私は冷蔵庫から麦茶を取り出し、湯呑みに注いだ。

長く背負っていた重荷を肩から下ろし、せいせいの気分で記録書類をロッカーに戻した。

そして「矢部玲美」と背表紙に書かれた青いファイルを引き出した。玲美の少年事件調査記録簿だ。

机に戻り、調査記録を一枚一枚めくる。玲美の前半生が生々しく浮かび上がってきた。

学校からの通報で虐待が発覚し、児童相談所が彼女を一時保護したのが九歳のときである。継父と実母が一緒になって三年以上にわたり虐待を加えていたとある。その内容は暴行とネグレクトである。しばらく施設に入出所を繰り返し、児童養護施設から自立支援施設で寮生活を

送り中学校を卒業している。十六歳時に窃盗事件で京都家裁に初めて係属している。このとき司法修習中の佐伯さんが調査、審判に同席し、これが佐伯さんと玲美の初めての出会いということになる。そしてその三年後玲美が十八歳のとき、裁判官二年目の佐伯さんから二人は再び京都家裁の法廷で再会する。玲美は四国の女子少年院丸亀少女の家に送致され、以後については記録はない。ただ明らかなのは、その十数年後に三十三歳になった玲美が自ら命を絶つとき、そこに佐伯さんが居たということだけだ。それも今からもう九年前の話である。

佐伯さんの申述書によると、二人は長い期間不倫の関係にあったという。

部長判事はそのことに触れなかったが、判事がかつて自分が審判を担当した女性と不倫関係にあった上、その自殺現場に居合わせたとなれば、それだけで相当な醜聞だ。警察は判事の社会的立場を付度しその場で収めたということなのだろうか。

裁判所を出ると、外はもう星降る夜だった。自宅に向かい、今出川通を東に向かうと正面が如意ヶ嶽、通称大文字山だ。今は夜闇に沈んでいるが、五山の送り火となれば赤くちろちろと大の字が浮かび上がる。それは、祖先の霊だけでなく、餓鬼道に落ちて苦しむ亡霊をも供養し、あの世に送るしるべとしての松明だ。この世に思い残さぬ平安な魂の帰還を、地上住まう者たちは古から祈ってきた。それは生きてあるとき無念に縛られ、安らかな成仏が望めない死

があまりに多かった証だろう。それは現在も変わらない。暑い夜、私はそれを思っていた。

佐伯さんの住所がわかった。和歌山県の南端、串本に住民票を登録していた。私は、和歌山家裁新宮支部に調査室を借りる手筈をとり、新宮支部に調査面接に訪れるよう佐伯に通知を出した。面接ができればこしたことはないが、通知に対してなんらか連絡が来ることを期待した。そして、電話があった。

「森村さん？」

「はい、森村です」

すぐに佐伯さんの声と分かった。

「ご無沙汰してます。佐伯ですよ」

「ご無沙汰しています。お元気ですか」

「元気なわけではないですよ」

そう言って苦笑のような息遣い。

「森村さんは元気されてる」

私に問い返した。

「まあ、相変わらずです」

ちよつとした違和感。

「調査呼び出し拜見しましたよ」

「届きましたか」

「おかげでまた体調を崩して寝込んでますよ」

やはり少し違う。

「新宮まで出るのはちよつと無理だね」

「体調崩されてるのなら、期日を延期しましょうか」

「そうじゃない。うちまで来てくれよ」

何かささくれ立った語調を感じる。苛立っているのか。

「大丈夫ですか。ご無理されなくても、日を置いて落ち着いてからお話伺っても良いですが」

「こういうものなんです。裁判所っていうのは」

皮肉な言い方をして鼻で笑う。

「串本駅からバスで十五分くらいかな。調べればわかるでしょう」

「わかりました。ご自宅までうかがいます。バスの時間調べますので、その日の午後を目安に

予定しておいていただけですか。詳しい時間は追ってご連絡します」

「ああ、腹くくって待ってますよ」

「よろしく願います」

私の方こそ、腹すえて赴かねばならない、と思っていた。

私は尋ねた。

「どこかお悪いんですか」

「統合失調症ですよ」

「ああ、そうなんですか」

即、平静に返答した。

「このところよかったのにな。君の呼び出し状のせいだ。またしんどくなった」

「あと二週間ありますし、ゆっくりされておいて下さい。またご都合悪くなったら、ご連絡ください。そちらの電話番号も教えていただけますか」

番号を聞いて、電話を切った。

電話の声は、私の記憶している佐伯判事の印象とはまったく異なっていた。寡黙で頑なというのが彼のまもっていた気配だ。相手の心持お構いなしに距離を詰めてくるその口ぶりはまる

で別人だった。そして統合失調症を患っているというが、在職中そのような兆候はいっさいなかったはずだ。そもそも精神病に罹っている裁判官などあつてはならないから、細心の注意が払われているはずだ。いや、それは思い込みだ。本当にその兆候はなかったのか。時折見せた彼の思い詰めたその目を思い出す。しかしそれは、人を裁くなどと言うただならぬ職責を考えれば当然でもあるし、鬼気迫る表情もむしろ誠実さの表われと受け止めていた。いつとき狂気に隣接するほど深刻な葛藤を心の底に秘める人であればこそ、私はこの機関の職員を信頼できた。それが対面する人の深淵への畏敬だと思うからだ。

窓の外を見た。鬱蒼とした木々がこちらを見ている気がした。心配気に。

午前八時半京都駅発、新宮行特急くろしお。私は乗り込んだ。

すでに冷房が効いている。私は窓側の座席に腰を下ろし、ハンカチで顔や首の汗をぬぐった。平日ではあっても学校はもう夏休みだ。乗り込んだ家族連れが大声を上げている。

天王寺から堺を過ぎると、車窓は町並みから田畑へと移り、山あいから海も覗いた。

やがて特急電車は、紀伊半島の海岸線を一路南下する。和歌山県は南北に長い。和歌山市は大阪からわずか四十分の位置にあるが、県北端に位置するため和歌山県下にとっては北のゴ-

ルと感ぜられる。だから和歌山は大阪からの影響も乏しく、独立した気風、風土を誇っている。

すでに和歌山市も開放的な空気を持っているが、御坊を過ぎれば望む海は一面の太平洋である。大洋が開かれるその圧倒的開放感、和歌山独自の魅力である。四方を山に囲まれ、大気までが千年の淀みにこもっている京都から見れば、それはまさに異郷の風情だ。その一方で、和歌山の内陸熊野は修験の靈域で、全体が秘境の趣である。外に向かう開放のエナジーと内部に沈潜し深奥の初源にどこまでも降りてゆく黙想。真逆のベクトルが相殺されずにむしろ互いに増幅し合う巨大な錯綜の地平こそがこの地の魅力だ。

白浜で海水浴目当ての多くの乗客が下車すると、車内はしんと静かになる。そして青い波が白く砕ける絶好の景観が次々窓外に広がってゆく。いよいよ佐伯隆博に会うのだ。

二

潮岬線のコミュニティバスを降りると驚いた。暑い日差しの中、佐伯が通りに出て待っていたのだ。半袖の開襟シャツで首にタオルをかけ、麦藁風の帽子をかぶっている。

(こんなに太っていたか)

思わず心で一人ごちた。長身ながらも、下腹の出ているのが目立つ。かつての精悍な印象は跡形なく消えている。その代わり、一層その笑顔は人懐こく、むしろどこか痛ましい。

「やあ、ご無沙汰！」

そう言って彼は両手で私の手を握り揺すった。

「このバスだとよくわかりましたね」

私も笑顔で言った。

「このバスしかないでしょう。本数少ないのだから」

「彼が私の来訪を心底喜んでるのが伝わってきた。きっと朝からずっと待ち焦がれるほどだったのではないか。」

「ほんとに久しぶりだ。遠かったでしょう。よくお見えになった。こっちはす」

彼はまるで無人島に救助船が現れたように、私を歓迎してくれた。しかし、私的な来訪ではない。私は家裁調査官として面接調査のため業務出張でやって来たのだ。

彼は古い平屋の一軒屋住まいであった。一人暮らしなら十分すぎる広さだ。応接間は書棚いっぱい法律書を背に執務机があり、ソファはまだ新しい。しかし部屋全体掃除が行き届いて

いない。床ははっきり言って汚い。ここを弁護士事務所としていたのだろうか。こんな辺鄙な場所に依頼者が来るだろうか。私は想像もできなかった。

応接ソファに腰を下ろした私に、彼はペットボトルのお茶を持って来た。私は手で制した。

「佐伯さん。今日は業務ですから」

「ああ、やっぱり。じゃ、悪いけど、僕はのど乾いたからいただくよ。こういう場合はどうなるのかな。調査が済んだらかまわないかな」

「いや、たぶん今日はずっとアウトです」

彼はぐいとペットボトルをあおぎ、ごくごくとのどを鳴らした。

「早速ですが、よろしいでしょうか。今日は体調は」

「ああ、この前の電話は申し訳なかった。頭がずーんと重くて、耳鳴りまでしていたものだから、ちよつと失礼な電話だったかもしれないね。あれから、体調はぐつとよくなってね、喜んでるんだ」

「ああ、よかったですね。病気はいつごろから」

「お、もう調査が始まってるんだ。うん、そんなに重くはないんだ。去年の、夏頃かな。これはちよつといかんと、自分で思ってたね。うん、自分でわかったんだ。それで秋、十月かな。新

宮の鎌田病院に入院して、今年の二月まで入ってたんだ。もう大丈夫だとは思うんだけどね、もう弁護士はやめちゃったんだ。それはそうだ。またぶり返すことはあるからね。弁護士は無理だ。今はジムに通ってるんだ。まだ二週間だけどね、ここから歩いて十分くらいのところ、ふれあいセンターというところで老人向けのジムがあるんだ。これがとてもいい」

「佐伯さんまだ四十代なんですから、すぐ体力つきますよ。病院の方は通ってられるんですか」

「うん、こればかりはさぼれないよ。薬は毎日欠かさないよう先生に言われているから、きちんきちんとのもんでる。今は薬飲むのが僕の仕事だ」

そう言って彼は席を立った。

饒舌だ。身なりだけでなく、裁判官当時とは表情や態度までが、まるで別人のようだ。それは長年自分を縛っていた枷が外れて自由になれたのだとも言えるが、統合が失われればらばに崩れそうな人格をあやうくつなぎとめている状態にも見えた。

戻ってきた彼は名刺を差し出した。

「これが主治医先生の名刺だ。コピーするかい」

「お願いします」

「わかった」

「それで、今回の失踪宣告事件なんですが、概要お分かりですか」

「頼む」

「はい。申立人は事件本人、不在者の池山玲美さんのご主人です。申し立ての趣旨としては池山玲美さんが天ヶ瀬ダムに転落して生死不明の状態に」

「警察の調書は請求された？」

「は？」

言葉を急に遮られ、戸惑った。

「私が宇治署で調書をとられたのだけど、読みましたか」

「はい。読みました」

「はい、ならば調書のとおりです。調査は終わりですね」

「いえ、聴取書で不明な箇所もあります」

「調書のコピーはありますか。あれば見せてください」

「すみません、今日は当時を思い出して、話を聞かせてください」

「ふん」

佐伯は不満気に鼻を鳴らした。

「まず、佐伯さんと不在者玲美さんの関係ですが、教えていただけますか」

「ああ、友人というのかな、親しい友人ですね」

歓迎してくれた態度は一気に消え、見るだに不快で不満そうに見える。

「いわゆる不倫の間柄で、前日にはラブホテルに泊まった、と申述書にはありました」

「あ、そう。もう昔のことだから、思い出せない。そういうことが、あったのかもしれない」

「それで、天ヶ瀬ダムに行くことになった経緯は」

「うーん」

「焦らずにゆっくり思い出してけっこうですよ。お待ちします」

佐伯は目を閉じ、長い溜息を吐いた。顔は険しい。怒っているようであった。長い沈黙が流れ、ようやく佐伯が口を開いた。

「森村さん、事件の担当判事は誰ですか」

驚いた。目にうっすら涙を浮かべている。

「熊谷裁判官です」

なるほどといった様子で佐伯はうなずいた。

「警察の資料で、失踪宣告の決定できなかったのかな。熊谷部長が僕に会うよう森村さんに言っただけだね」

私は否定も肯定もしなかった。再び、彼は沈黙する。閉じた目から涙が頬に流れ、しきりに鼻をすすっている。そしてもたれていた身体を起こし、口を開いた。

「やはり調査は終わりだ。やめやめ」

そう言って両の手のひらで両膝をぽんと叩いて立ち上がった。

「森村さん、終わりです。呑みましよう」

私は予測していた。

「申し訳ありませんが、今日はずっと調査です。私にとっては」

彼は何も言わず部屋を出て行く。

「呑まれないでくださいよ」

私が声を張って付け加えると、彼は缶ビールとナッツの缶を持って現れた。

「こんなの、水ですよ」

そう言って、ビールのプルトップを音を立てて開けた。ごくごくビールにのどを鳴らす。

「毎日呑みますか」

「ああ、朝から呑んでますよ。その方がずっと身体の調子がいい」

ナツツをつまむと口に放り込み、ぽりぽりと頬張る。指についた塩をなめてはぬぐう。

「最初に断っておきますが、佐伯さんがおっしゃることはすべて調査結果として裁判官に報告するつもりでいてください」

私は釘を刺した。

「酔っ払いの放言だと調査にはならないし、おまけに僕は精神病患者だからね。何言い出すかわからないよ」

がまんしていたのか。あつという間にビールを軽く一缶開けると落ち着いた様子だ。

「もう忘れたけれど、たぶん警察で話したことは事実と違う。どうして本当のことをしゃべらなかつたのか。それは、そもそも僕には本当のことを理解する能力がないからだ」

「事実と違うのは、どういったところですか」

「あの日はデートなんかじゃない。玲美が切羽詰まって僕に頼ってきたんだ。ずっと会ってなかつた。悪いことしたよ。警察に話したのは作り話だ」

なんとということだ。内心驚いたが、しかしどうして自分に不利な不貞関係を強調した。

「熊谷部長は僕を無能な役立たずと見下していたから、僕の調書など信用できないと決めつけ

たに決まってる。部長の言う通りだよ。でもね、部長は僕をすっかり監視していたつもりかもしれないが、僕だって馬鹿じゃない」

ナッツをもうひとつかみ、口に放り込む。

「今日は日帰り出張だろ。明日は裁判所の予定入ってる？」

「佐伯さん、明日は土曜日ですよ」

「そうか、じゃ、今日はここに泊まるといい」

しっかりと佐伯に付き合う覚悟であった。

「やっぱり一人だけ呑むのは気が引けるな。水ならいいのか」

「自分で買ってきます。このあたり自販機ありますか」

「あ、そうか。バス停の先にある。よし、一緒に行こう」

私も腰を上げた。

強い日差しにむっとする熱気だ。しかし乾いた風がある分、不快ではない。私は佐伯と二人並んで歩いた。

この人が数年前までは裁判官として黒い法衣をまとい法廷に立っていたのだ。神妙な顔をし

て、低く落ち着いた声で訴訟を指揮し、判決を読み上げていたのだ。信じられない。彼はすっかり変わってしまったということか。ならば何があつて変わってしまったのか。しかし、おそらくそうではない。とりとめなく言わば無責任な態度で振る舞っている今の彼の方が私には自然に見えた。

「森村さんはどこの出身でしたか」

「九州です」

「九州！ 九州のどこ」

「鹿児島のア久根というところです」

「ああ、九州は福岡しか行ったことないなあ」

「佐伯さんは和歌山ですか」

「僕は和歌山市内の出身だ。ここは母方のさとで、小さい頃夏によく来ていました」
そうして、ひょいと彼は指差した。

「あそこ」

自販機が二台畑の前に並んでいる。背後には青空の積乱雲。風が強い。

私はスポーツドリンクと缶コーヒーを買った。

そして帰る道すがら、彼は言った。

「玲美と一度だけこつちに来たことがあります。レンタカー借りて」

思い出しているようだった。

「僕が司研に帰る直前だ」

「司研？」

「司法修習の実務研修で京都に来ていて、もう東京に帰らなくちゃいけなくて、二人でお別れ旅行ですよ」

え？彼女が十六で初めて家裁に係属したときのことか。もうそのとき二人は交際していたのか。

彼が黙ったので、私も問い返さなかった。

宅に帰ると、彼は奥に引っ込み、そしてビニールの袋を持ってきた。

「いいもの見せましょう」

そう言ってレジ袋の口を広げ、中から写真の束をテーブルに出した。

「ほら、これが玲美です。美人でしょう」

一枚の写真を私に差し出した。

馬にまたがった男の像の前に、若い女性が立っている。短いパンツにノースリーブの長いシャツ。薄い色の大きなサングラスをかけ、口をあけ笑っている。均整のとれた肢体。髪が大きく跳ね、派手な顔立ちの美人だ。

「こっちの方が顔が分かる」

渡された二枚目の写真は男性とツーショットの古い写真だ。目元は涼しく、遠くを見ているように見える。先ほどの写真よりずっと若いようだが、雰囲気は大人びて暗い。そして隣りの男性に驚いた。若き日の佐伯だ。今よりずっと痩せて、長髪である。

「それがさっき話したときのものですよ。写ってませんが、海を背にして駐車場で撮ってもらったんです。浦島ホテルの近くだ。僕が二十二で彼女は十六。二人とも若いでしょう」

「このときもう交際されていたのですか」

「ああ」

そう言って、写真を一枚一枚懐かしそうに眺めている。私も写真を手に取った。すべて玲美の写真だ。場所も年代も異なり、彼女の姿もまったくさまざまだ。髪型も表情も変わると一見別人のようにさえ見える。季節が違うからというだけでなく、服装の趣味が違い、雰囲気もまったく異なる。カジュアルで清楚にさえ見える陽光の下の写真もあれば、夜の店で赤い唇を大

大きく開きとろんとした目で今にも甲高い嬌声が聞こえてきそうな写真もある。まだバランスの悪い明らかに十代の写真もあれば、まるで中年らしい諦めと疲れにひしがれて見える表情もある。

「なんと言えがいいのだろう。私は佐伯と玲美の関わりの濃密さに息を呑む思いだった。まるで家族の写真を見せられているようだ。黙って写真を飽かず眺めている佐伯に、私は思いをそのまま口に出した。

「まるで家族の写真見せられてるみたいです」

佐伯は手元の写真から視線を動かさずに、ふんと鼻から息を吐いた。

「長い付き合いだっただんですね。驚きました」

佐伯は黙っている。

彼は、もう私のことなど忘れてしまったかのように、一枚一枚写真を味わうように見つめている。その姿に、私はしみじみと感じていた。ただならぬ関わりなのだ。彼の人生にとって、玲美はただならぬ存在なのだ。その事実が強烈に私に迫ってきた。

彼は一枚の写真を、私に向けてテーブルの上に投げた。

手に取ると、彼女が胸の高さまである金属の柵にもたれ、深い緑の山を背景に立っている。

「天ヶ瀬」

と、佐伯が言った。

天ヶ瀬ダム？ 私は目を見張った。自殺時の写真なのか。しかし、天候は晴れている。そのときの写真ではない。私は彼を見た。

もう彼は写真をその手から離し、肘をついて、顔を隠すように額を手のひらで支えている。

私は声をかけようもなく、彼のかもし出す重苦しい空気をただ受け止めていた。

そして彼が口を開いた。

「心配しないでいい。ちゃんと全部話す。でも少し時間をくれ」

そして散らばった写真を集めて、ひとつにまとめて輪ゴムで留めて、袋に収めた。

「何年ぶりだろう。一人では見る気がしなくてね」

私を見て、力のない笑い方をした。その目に涙がにじんでいる。エアコンが止まり、彼が鼻をすする音が静かな部屋に響いた。ひとしきり涙を流し、彼は気分が落ち着いたらしい。少し優しい顔になっている。

「決して彼女を殺すつもりなんかじゃなかった」

彼はそう口にした。

そして机の端に置いてあった菓子缶の蓋を開け、彼は処方薬を机に並べた。包装から錠剤を取り出してひとつずつ口に含むとコップの水で流し込んだ。

「もうずいぶん弱い薬になってるんだ。少しならお酒もかまわないって先生がもう言ってくれてるほどだから」

そう言って、薬の包装を手のひらで握りつぶした。

「いつときはすっかり気力がなくなってるね。なにやるのも面倒で、気がついたらひと月以上着替えもしてなかったよ。顔も洗わないし、糞もふかない。あとで聞いたたら、ベルトを通さずに、ズボンめくれたまんま糞まみれのパンツでこの辺うろろしてたらしいよ」

彼は溜息をもらした。

「先生が言うには何か病気の原因、トリガーってうまいこと言うんだ、そういう引き金になったことはあるだろうけれど、生きてきた人生の間に納得できない、なんか自分でつじつまの合わない、そういうねじれがずっと重なって、これ以上はまずいという言わば警告みたいなしるしとしてね、この病気を考えたらいいって言うんだ。ようやく僕に合う薬が見つかって、少し人の話聞けるようになってからだけど、そう言われて納得したよ」

缶蓋の蓋を閉めて、彼は脇へ押しやった。

「裁判所から通知が来て、不快だったけど、先生から言われたこと思い出してね。これはきつと治療の最後の仕上げだと思うことにしたんだ。しかし、全部話したそのあと僕はどうやって生きていけばいいのだろう。そう思うと無性に怖いよ。多分、生きてはいけない。しかし、ともかくあなたは来てくれた。それに応えないと悪いし、僕もようやく聞いてくれる人にこうして出会えたわけだ。多分最高の人選だ」

彼は自分で話を切り出すことができず、周辺の話題でごまかしながら、私を促しているのだと理解した。

「司法修習の見学研修のときに初めて玲美さんにお会いになったんですね」

「いえ、違います」

彼はそう短く答え、また口をつぐんだ。やはり、どうしても語ることにブレーキがかかるのだ。私はただ待つことにした。ただ静寂が時を刻んだ。長い沈黙のあとで、ようやく彼は口を開いた。

「本当にびっくりした。十六になった玲美はすっかり大人になって、きれいになっていた。

審判の人定で僕は玲美だと分かって、信じられない思いですと彼女を見つめていたけれど、彼女は僕に気づかなかった。だから僕は審判が終わるとトイレに行く振りをして彼女を追

いかけた」

彼はゆっくりとした口調で語りだした。

「忘れられない。その日の夕方、枳形商店街の喫茶店で会ったんだ。

玲美はこうやってね。両手をテーブルにつけて、目を大きく開いて、俺をじっと見つめてきた。そして口を開くと、りゅうはく？ 本当にりゅうはく？ って信じられないって顔で言うんだ。僕も、うんうんとうなずいて、れみ！ と声を上げた。

僕も夢のようだった。だって当然でしょう。僕が法曹を目指した理由は彼女だったんだから。もう二度と、会えるわけない、その玲美と会ったんだから、信じられなかった」

もうはるか二十年以上前のことなのに、昨日の出来事のように語る。そのときの興奮が生々しくよみがえっているのだ。

しかし、彼がせっかく語りだしたというのに、どうしたことだろう、私は彼の話を聞くのをひどく苦痛に感じ始めた。

やはり彼はまだ患者なのだ。彼の精神的混沌が感応してこちらの精神に流れ込み、砂袋のしかかるような独特の鈍重な負担感に襲われる。私は彼の言葉を受け止めながら、一方で目の前の現実の彼の姿を情景としてよく眺めるように努め、距離と構えを必死に保持し耐えてい

た。

「運命を感じるなという方が無理でしょう。」

本当にうれしかった。それは彼女も同じだ。若かったし、一気に二人その場で燃え上がった。

もう店を出るときから、こう腕を組んで身体を押しつけ合うようにして、彼女の暮らす小さなマンションに帰ったよ。僕は早く彼女を自分のものにしたくて、食事もせずに夜中まで二人ずっと裸だった。僕は借りていた部屋にはもう帰らず、京都の実務研修の間中彼女と暮らしていた」

一息つくくと、彼はふっと我に返り、興奮している自分に照れるような笑みを浮かべ、私を見て話し始めた。

「司法修習生ともあろう者が、家裁に係属した十六歳の少女と同棲するなんて信じられないだろ。でも、僕には不思議でもなんでもなかった。十六歳でも関係ない。だって、玲美だよ。他の誰かなら話は別だ。でも、相手は世界中にたった一人、あの玲美だ。僕はもう何も怖くなかった。」

楽しかった。毎日がハネムーンだ。即日の起案に追われるし、実務修習の成績には任官がか

かっていたから、手を抜けなかった。玲美は本当によくしてくれたよ。玲美のおかげで僕の研修はとても評価されたし、充実したものになった。新婚の気分、いや、新婚生活そのものだった。

あんなに、あんなに幸せだったのに」

一転、顔を曇らせうなだれる。

「夢のような日々はたった四ヶ月で終わった。僕は東京の司法研修所に一旦戻っても、また二カ月後の選択実習で京都に帰って来るつもりだったし、連休あればすぐに京都に行けるし、なんの心配もないと思っていた。また二人で会えると思っていた。でも東京に帰る日が近づくにつれ、玲美は怒ったり泣いたり、とても不安定になった。僕はたいしたことないと彼女の言うことを真剣には受け止めなかった。僕の痛恨事だ」

ぐったりとして彼は口をつぐむ。

「彼女は僕が東京に行って、もう十日後にはマンションを引き払い、連絡を絶った。僕は捨てられたと思っていましたが、彼女も僕から捨てられたと思って出て行ったんだ」

部屋の静寂にエアコンの音だけが響く。私は、和歌山の海を背に撮ったという二人の写真を手に取った。そしてその青年と少女の顔にしばらく見入っていた。

「だから」

佐伯が口を開いた。

「だから玲美が虞犯事件で送られてきたときは、衝撃で打ちのめされた」
ありありとそのダメージが伝わってくる。

「前のときは、ただの万引きで不処分にすぎなかった。あれから三年で、まったくの別人だ。闇社会に転落して、ぼろぼろにされていた。僕は無性に腹が立って、腹が立って、玲美をこんなにした奴らをみんなぶち殺してやりたいと思った。玲美だって本当にバカだ。胸倉つかんで、怒鳴りつけてしばき倒したいと思った。でもね」

佐伯は少し言いよどんだ。

「でもね、玲美の方こそ、僕を殺してやりたいくらいに恨んでいたんだ」

沈黙が流れる。まるで舞台上の朗読劇をみているような錯覚を覚えた。

「僕は彼女に腹が立っても、恨んだり憎んだりそんな感情はこれっぽっちもなかった。むしろ逆だ。彼女のことを忘れられず、ずっと引きずっていた。でも、彼女は僕を恨んでいた。自分をめっちゃめちゃにされたと恨んでいたよ。やくざにひどい目にあったのに、あいつらよりも僕を恨んでいた。そのときは審判廷で会っただけだから、分からなかったけれど」

大きく息を吐いた。

「彼女はわずかな親戚からも疎んじられ天涯孤独だし、抗争している組に関係していたからどこに預けても拉致される心配があった。覚醒剤の後遺症もあったから、四国の少年院に送った。ほかに選択肢はなかった」

私は彼の奇妙な一人語りに、船酔いのような耐えがたさを感じ、尋ね返した。

「佐伯さんは、自分が審判する少年との関係を隠し通したのですか。本来、公正さを担保するため、裁判官倫理上は当然自分から忌避して担当を辞退すると思いますが、そこはどう思っただらしたんですか」

「佐伯は奇妙な顔をした。」

「おかしいことを君も言うんだな。もし辞退したら、玲美を他の判事に裁かせることになるじゃないか。そんなことありえない。逆に聞くが、だったらなんで僕は裁判官になったんだ。そうだろ。調査官なら、それくらいわかるだろ」

理解ができない。

「復讐するは我にあり、だよ」

「旧約聖書の言葉ですね」

「裁くなかれ、復讐するは神にあり、だ。人に人を裁く権能などない。そもそも人を裁くことが罪じゃないか。ならば人を裁く罪は何によってあがなわれる。その人を裁くことの罪悪を思い知る人こそがふさわしいじゃないか。それが刑事法制に先立つ前提だ」

やはりこの人の逸脱は深い。そう思った。

「神が裁いてくれないなら、いったい誰に裁かれない。そうだ。僕以外にいったい誰が玲美を裁けるんだ」

彼はペットボトルの茶を飲んだ。

「三ヶ月おきに僕は丸亀少年院に手紙を書いた。最初は返事も来なかったが、一年半たってやっと返事が来た。仮退院したくても帰住地が定まらず、彼女自身が窮したんだ。保護観察がついても、すぐ前のしがらみに戻ってしまうことを彼女は怖れていた。検閲を受ける手紙だから、書けない本音は行間から読み取るしかない。少年院は僕が裁判官だと知っているから、あくまで熱心で親切な裁判官という矩を越えることは書けなかった。当時僕は奈良地裁葛城支部に転勤となっていたから、奈良市内のクリーニング工場に住み込みで働けるよう玲美の保証人になった。どうしてそこまでするのかと中にはいぶかしがる人もいたと思う。それでも、いつまでも少年院に置いておくわけにはいかないから、とても感謝された」

佐伯は口をつぐみ、しばらく思いに沈むように黙り込んだ。

「仮退院の翌日、会った。互いに、交わす言葉もばい。玲美は僕と目も合わせなかった。少年院生活が抜けきらず、どこまで言葉を口にしていいのか、戸惑っていたんだ。中年の女性保護司が担当だった。嫌なばあだ。何も玲美のことわかってない。玲美も保護司のこと嫌がって、代わりに毎週僕に会いに来ては、生活の様子を報告してくれた。住み込みの寮暮らしだから外泊するわけにはいかないが、僕との間は前みたいに戻った。そして保護観察が終わるのを待って、大阪の羽曳野にマンションを借りて、また二人で暮らしたんだ」

「同棲したのですか」

「私はちゃんと結婚したかった。しかし彼女が頑としてうんと言わない。どうしてと聞いても、彼女は理由はないと言う。

喧嘩ばかりだった。僕は結婚して二人の子供を欲しがったが、彼女は避妊しないと絶対に許さなかった。

そうして三年が経ってようやく彼女が根負けして、結婚を承諾した。そして二人で式場の予約をしたその翌日だ。玲美は黙って家を出て行ったんだ」

彼は暗い表情に沈み、頭を抱えた。

「すべて残したまま、彼女だけが消えた」

闇の底から響くような声に私はぞっとした。

それにしても、玲美という女性の人物像がどうしてもつかめない。彼は、彼自身と玲美二人の話をしていたつもりでも、彼はただ自分のことを語り続けていただけだった。

「ああ、もう暗くなってきた」

佐伯が窓の外を眺めて言った。

「食事どうします。自分でお金出せば大丈夫なんですよ、一緒に食べても」

「そうですね」

近くにある蕎麦屋に行くことにした。

玄関のドアをくぐると、思わず満天の星空を見上げ、ああと声が出た。生き返った気がした。正直、不吉で暗い磁場から、やっと解き放たれた思いだった。

カラオケバーも兼ねるといふ、その小さな蕎麦屋で私たちは向かい合い座った。私は天ざるとかやく飯を食べた。佐伯も同じだ。

会話はほとんどなかった。これから物語は玲美の死へと向かう。佐伯がりのまま語れるよ

うに、私は対話者として同伴せねばならないのだが、私はどこか圧倒され、後ずさりをただこらえているだけの自分を感じていた。彼が背負っている病というより、彼の魂に刻まれている宿業が、私自身の魂の弱みにつけ込んで狡猾に痛みどころをえぐっているように思われた。私はじたばたせず、自身の無力を見据えながら、彼の奇妙に歪んだ漆黒の闇の中に、また分け入ってゆくことを自分に課していた。

沈黙のまま食事を終え居宅に帰ると、何より先に彼は菓を飲んでこう言った。

「風呂いれようか」

私は首を振って答えた。

「話を終えてからにしましょう」

佐伯は笑みを浮かべた。

「逃がさないね。いいでしょう。僕はもう虜だ」

私は尋ねた。

「今度は私から少しお尋ねしてよいですか」

「ええ。お手柔らかに」

「玲美さんはどういう方だったのですか」

「これはまた抽象的な問いだな」

「よくわからないのです。その人となりは他の人からどういう人と見られていたのでしょうか」

「感情がきつかったね。普段は普通です。でもそれは自然じゃない。完璧に演じている。胎の中はまったく別だ。それが女性の強さではあるのだが、玲美は人を信ずることができない」

私は直裁に印象を返した。

「えらい分析的ですね」

苦笑する佐伯。

「機嫌損ねるともうどうしようもない。私の何が原因なのか、まったく身に覚えがないしわからない。そして僕の存在すべて否定され、もう悪魔扱いだ。逆上して泣きながら責められるが、どうしてもいいかわからない。ひどいもんだ。短くて三日間、長いとひと月近くそれが続く。少し落ち着いているが、そのうちまた繰り返した。異常だよ。それでも僕は、彼女を理解してあげようと努力した。しかし、理解なんかできるはずがない。めちゃめちゃなんだ。彼女自身だって、自分のことがわからなかったんだ。ただ」

一呼吸置いた。

「彼女は僕と一緒に、根っこの部分に大きな傷があって、それが決して癒えないんだ。どうしてもその傷から血がどくどく流れるんだ。痛いんだ。生きておれないくらい痛いんだ」

顔が苦痛にゆがんでいる。

「これは負った者しかわからない。だから決して口にしない。普通に身体ひとつで全力で走れる者と、足をくじいて背中におもりを背負ってる者が、同じスタートラインからよういどんするんだ。でも、しょってる重い土嚢も捻挫した足も人には見えないし、わかってもらえない。なんで途中でへたりこむ。弱すぎる、どうしようもないとびんたされる。そういうことだ」

私は問う。

「今おっしゃったのは玲美さんのことですか？佐伯さん御自身のことですか？」

「玲美のことだ」

「玲美さんが人生のはじめに背負わざる得なかった深い傷を佐伯さんだけは理解されていたと」

「そうは言っていない」

「それは共感だったのでしょうか、それとも佐伯さんがご自身の痛みを玲美さんに投影されていたのでしょうか」

「どこが違う。共感だろうが投影だろうが、それはただの解釈だ」

「いえ、明らかに違うと思います。自己愛に基づくただの同情は、相手を受け止め理解することはできません」

「何が言いたい」

佐伯は挑むような目で私を見ていた。

「だから先ほどの問いなのです。彼女が抱えていた傷を佐伯さんははっきりご存知だったのかと。少なくとも、先ほどの玲美さんについての語り方は、玲美さんを私は理解しているという強い前提を感じました。私だけは彼女を分かっていると。ですから、その根拠を知りたかったのです。」

それを傷と呼ぶのか、あるいは過酷であってもそれを人生に呼びかけられた主題と呼ぶこともできると思うのです。そのまなざしを飛び越えておられる」

「くだらない」

佐伯は不敵な嘲笑を浮かべ、吐き捨てるように言った。程度の低い話には付き合っておれないという顔だ。しかし私は彼の愛着の異様さを彼自身もうすうす気づき、またそれを内心怖れているのだと感じていた。

「どこまで話した」

「結婚を準備されていたときに彼女は出て行ってしまったと」

「ああ、そうだ」

佐伯は缶ビールを開け、一口飲むとまた語り始めた。

「玲美は僕のキャッシュカードを持って出たんだ。盗難届を出そうと思えば出せるんだが、それが僕と玲美をつなぐ唯一の絆だし、そのうち帰ってくるかもしれないと虚しく期待して、残高が底をつかないよう毎月入金したんだ。彼女が引き落とすことで彼女が生きることが確認できるからね。」

しかし、私のもとから逃げ出したくせに、私の金だけは欲しいなんて、そんな馬鹿な話はない。そうだろ。僕はカードを差し止めしよう、紛失届を出そう、何度も思った。そう思うんだが、どうしても踏ん切りがつかない。

未練ですがる自分にうんざりしたよ。しかし毎月だった引き出しが、そのうちに二カ月おきになる。三ヶ月おきになる。そうして、引き出されなくなった。

何か長続きできる仕事に就いたのか、それとも新しい男ができたのか。そう思うと心は騒いだけれど、さすがに出て行ってもう一年以上が経っていたから、僕も思い切ることができた。

見事に、彼女の呪縛から解き放たれ、て、重い鎖が外れた」

彼は自嘲的な笑いを浮かべた。

「おかしいでしょう。私は裁判官ですよ。でも、私生活はまったくそんな体たらくさ。

それでも僕は決して裁判を手抜きして切り貼りで裁判書をごまかすことはしなかったよ。もうとつくに三十を過ぎていたからね。大いにやりがいを感じていた。

それから、僕だって他の女性とも交際したし、彼女のことは忘れていた。思い出したくもない、もう遠い過去の話だ。

そうしたら、何年も経ってから突然連絡があった。知らない男だ。池山という」

玲美の夫だ。

「本件の申立人だろう。池山修三」

「池山が佐伯さんに連絡してきたのはいつになりますか」

「玲美が身を投げる一週間前だ」

「すみません、ここからメモを取っていいですか」

「ああ、メモを取ってください」

私は面接用のノートを取り出して、ペンを走らせた。

「気にせず、お話ください」

「ああ」

これからいよいよ核心へと向かう。

「どういう電話だったんですか」

「話し方はへらへらしてるんだが、俺と会わないとあんた自身が困ることになるって言うんだ。ゆすりだ。私はてつきり、担当した裁判の関係者からの電話だと思った。無視するに限ると思っただが、玲美の名を出してきたんだ。本当に驚いた。そして動揺したよ」

佐伯は溜息を吐いた。

「指定された喫茶店に行くと、池山が座っていた。大きな喫茶チェーンの店で、周りには他の客がたくさん居る。池山はいんぎんな態度でね、まるで商談でもするように、名刺を出して話を切り出したんだ。」

何か普通の取引を提案するように、彼ははつきりこう言ったんだ。『玲美を買いまへんか。好きにしてかまへんさかい』

そう言ったんだよ。『玲美を買いまへんか。好きにしてかまへんさかい』
耐えるように、彼は目を閉じてしばらく沈黙した。

「ただの売春じゃないか。ばかばかしい。そんなやばい話に巻き込まれたら最後だ。返事もせず立ち上がろうとしたら、こう言うんだ。『玲美が会いたがってまんねん。一目でもいいから、先生と会いたい、言うて聞きまへんねん』てね。僕は心臓をぐつつかまれた気分で、また腰を下ろしたよ。『玲美を助けたってください。玲美、先生に会いたがってまんねん』そう言うんだ。そして小声で『先生と玲美のことはよう知ってまっせ』下品な笑い方をして言うんだ。『まだ誰にも言うてまへん。ここにしまつたるさかい』胸をぽんぽんとこぶしで叩きながらね。僕は動転したし、混乱した。玲美はどうしてる。そう聞いたよ。『それが大変でんねん。助けたってください。先生会ってくれたら、玲美助かるんや。一日ゆっくり会うたってください。三本でいいんや』『三百万?!』馬鹿げた話だ。こんな男の話、何も信用できない。僕は、君は玲美とどういう関係なんだと聞いた。そしたら、愕然としたよ。玲美はわしの嫁やと言うんだ。ひもだ。知ってるだろ。金づるとして女と奴隷契約のように結婚して、搾り取るだけ搾り取る奴ら。大事にしてる女は他にいて、そっちに家庭がある。なんてことだ。うんざりした。絶句したよ。だから玲美は僕から離れたらいけなかつたんだ。こうなるに決まっていた」

私は、苦しそうにしている佐伯を見つめていた。

「僕はともかく、お前の話は全然信用できないと答えた。そしたら『ほなら、玲美からも聞いたらよろしい』と言って、池山が後ろ向くと、離れたところのシートに玲美が座っていた。そして、立ち上がって、こっちに来た。

玲美だった。あの玲美だ。こんな形で再会するなんてー。

小さく会釈して、池山の隣りの席に腰を下ろすが、うつむいて顔を上げない。決して、顔を上げようとしなない。

『こいつを助けたってください。こいつ何でもしますよってに』

池山の声が今でも頭から離れないよ」

うなだれて黙り込んだ佐伯に、私は声をかけた。

「それで？」

「玲美と二人で話をさせて欲しい、と言って、池山に席をはずしてもらった。

何年ぶりだろう。二人で向かい合うのは。僕は玲美への愛しさが込み上げた。挨拶の言葉を交わすよりも先に、僕は、あの男と結婚したというのは本当かと尋ねた。玲美はバッグから財布を出して免許証を僕の前に置いた。『池山玲美』と書いてある。僕はもう言葉がなかった。僕はもうどうでもよくなってきた。そして『わかった、金が目当てだろ。三百振り込むから、

それであいつも君も気が済む。それでいいだろ』突き放すように、彼女に言ったよ。すると、彼女が顔を上げて、首を振るんだ。目が合うと、泣きそうな顔になって、また首を振る』

佐伯の目に涙が浮かんでいる。

「僕は彼女の目を見て、心のたががくんと外れた気がした。今までずっとこらえてきた気持ちだが、到頭溢れだしてきたんだ。なんとも言えない悲しさと彼女への愛しさで心はいっぱいになった。僕は、爆発しそうになる気持ちを抑えながら、今度一緒にゆっくり二人で会おう、とようやく言葉に出しました。彼女は、うんうんと何度もうなずいた」

目に溜まった涙が、彼の頬に流れた。

「そして、彼女が口を開いたんだ。『りゅうはく』と僕に言った。僕も『れみ』と言った。言った後で、涙が出て、とまらなくなった。玲美も涙を流し『ごめん。ごめんなさい。ごめんなさい』と、繰り返していた」

「りゅうはく、と言うのは？」

私が尋ねた。

「僕の名、隆博だよ。たかひろでなく、りゅうはく、玲美だけがそう呼ぶ」

佐伯は鼻をすすり、涙をぬぐった。

「僕は、週明けに彼女の口座に三百万を振り込んだ。それだけは嫌だったから、池山の口座ではなく彼女の口座にしたんだ。そしてその週末に彼女と会うことになった」

「それが、十一月の五日ということですか」

「ああ、土曜日だから四日だ。彼女とは北山のカフェで待ち合わせた。

いきさつはどうあれ、運命の再会だ。僕も心弾んだし、もちろん玲美だってそうだ。ブルー系のストライプのワンピースに、白いパンツだ。老けて年齢よりも上に見えたが、変わらないう。きれいだ。僕の玲美だ。二人で顔を合わせれば、数年間会えなかったことなんて一気に吹き飛んで、昔のようにデートを楽しんだよ。買い物をして食事をして、そして偶然有名な俳優の舞台があるのを見つけて、彼女にねだられて劇を観たんだ。あまり面白いとは思わなかったが、彼女がいつときでも心休まればそれでいいと僕は思っていた。彼女ははしゃいでいたが、どこか無理している気がした。夜にレストランで食事をするころには口数も少なくなっていた。化粧で隠してはいたが、顔はやつれて肌は荒れているのがわかった。疲れている。嫌な仕事をしているんだと思った。だから聞かなかった、何も」

彼は長い吐息を吐いた。

「ラブホテルに泊まったというのは本当ですか」

「ああ、行ったよ。彼女が行きたいと言ったんだ。彼女はもう決めていたんだ。僕らにとってラブホテルは忘れられないからな。僕はそのときは気がつかなかった。また会えると思っていた。別れても別れても、会ってきたんだし、漠然と、ずっと会える気がしていた。彼女はとも僕を欲しがった。互いに歳をとってはいたけれど、やっぱり玲美は玲美だ。変わらない。何から何まで互いに知り尽くしている仲だ。彼女は何回でも求めた。それに避妊せずに直接僕を欲しがった。今思えば、たしかにおかしいんだけど、僕は気づかなかった。いつときの別れを惜んでいるだけと思った。それに僕は彼女のように浮かれる気持ちにはなれなかった。なにか、疲れていた。なにも考えたくなかった。意思もなく、ただ流されていくような気持ちだった」

「翌日、ダムに行こうと言ったのは玲美さんですか」

「玲美だよ」

「佐伯さんがダムに思い入れがあるとは知りませんでした」

「ああ、ダムマニアというのは口からの出まかせだ。玲美だよ、ダムが好きだったのは」

「どうして佐伯さんがダムマニアだって嘘をついたのですか」

「どうしてだろう。警察には本当のこと言いたくなかったんじゃないか。僕らのこと、警察な

んかにわかるわけがない」

口をつぐむ佐伯に私は尋ねた。

「玲美さんがダムをお好きだったんですね」

「ああ、ダムの上から下を覗き込むとぞくぞくすると言っていた。放水しているときは、飛び込みたくなるとよく言っていたよ。きつと、小さい頃から死ぬことばかり考えていたんだよ」

「それは今思えばということですか？ 当時もそう思ってたのですか」

佐伯は答えない。

そして、話し出す。

「土砂降りの雨だった。」

僕はビニール傘を差しながら運転席を降りると、助手席にまわりこんで彼女を傘に入れた。すごい雨だ。入口の守衛小屋にも誰もいない。だから受付に名前も書かずにゲートに入った。すぐに足もとがずぶぬれになるほど、土砂降りの豪雨だ。背中を丸めて、右手で彼女の肩を抱き、前かがみになって傘の下に身を縮めて歩いた。はじめはそろそろという歩き方だったけれど、靴がすっかり水を吸い込んで靴下までぐっしょり濡れると、もう雨を避けるのも面倒になって、そのうちずんずんと気にせず歩いていったよ。頂上の歩道を行くと、すぐに二人で右側の

手すりから顔突き出して下を見た。雨で視界も悪く、ごうごうという音がして、何か凄まじい情景だった。そして気がつく、彼女がいなくなっていたんだ。振り返ると、歩道の中央に彼女がずぶ濡れで立ってる。子供のようにならず濡れになるのを楽しんでるのかと私は思った。傘に入れようと私が彼女のところに駆け寄ると、いきなり彼女が私の手をつかんだ。そして私を左側の手すりの方へ引っ張って行ったんだ。私は思わず引きずられたが、足を踏ん張って思い切り手を振り払って、どうした！と叫びました。彼女は私の顔を見て、少し笑うと、すたすたと手すりの方へ行き、彼女はそのまま土砂降りの雨の中、手すりに飛び上がり、横を向いて両足で手すりをはさんでまたがったのです。危ない。私はびっくりして駆け寄ると、飛びかかるようにして、彼女の腕をつかもうとしました。すると彼女ががっと私の手をつかみ、私を思い切り引っ張ったのです」

短い沈黙が続いた。

「私は力いっぱい彼女の手を振り払いました」

見えるような気がした。体重をかけ、彼を思い切り引っ張っていた手を振り払われ、彼女はあっという間に飛ぶように消えて行ったのだ。

彼は青ざめた顔をして、嘔吐しそうに二三回えずいた。

私も黙っていた。そして彼を見守っていた。

彼はすっかり背を丸めて首を落とすし、ひどく気分が悪そうにただじっとしている。

そしてまたえずくと、のそのそと身体を倒し、くの字になって床に横たわった。

私は応接間を出て台所を見つけると、勝手に冷蔵庫を開け、麦茶を取り出しコップに注いだ。応接間に持ち帰ると、彼に、麦茶を持ってきました、と告げた。彼は横になったまま、小さくうなずき、大きく息をはあはあとしている。

私は彼の背中を静かに手のひらでゆっくりさすっていた。

そうして、彼はゆっくりと身体を起こした。

「すまない」

血の気の引いた真っ青な顔で彼は言った。別人のようにこわばった奇妙な表情をしていた。

「大丈夫ですか。窓を開けて外の空気を入れましょうか」

私がそう言うと、かぶりを振って、コップの麦茶を少し口にしました。そうして大きく息を吐いた。

「そしてね、すぐに守衛がやってきたんだ。それからどのくらいしただろう。警察と救急車がやってきた」

彼は私の方を向いた。

「そういうことだよ。そういうことなんだ」

彼はまだひどく気分が悪そうだった。

私は彼の目を見てうなずいた。

「横になっていて、結構ですよ」

彼は、ありがとうという風に力のない笑みを浮かべて、ソファに横になった。

「身体にかけるもの、ケットかバスタオルどこにありますか」

「すまない。トイレの隣の洗面所にタオルがある」

私は行ってバスタオルを取つてくると、彼の身体にかけて。彼はもう目を閉じてじっとしている。私はソファに座り、ずっと彼を見ていた。

やがて彼は寝息を立てはじめた。

ノートに記した先ほどの面接記録を整理し終えても、彼はまだ寝ていた。

のどが渴いた私は、一人でそつと彼の家を出ると、昼間に行つた自動販売機へと歩いた。

真っ暗だった。都会では見られないほど、一面の星空だ。灯台の光がさーっと走る。私はぼ

んやりとただ漆黒の空を見上げていた。

どうしたのだろうか。星を見ていると、無性に涙が込み上げる。痛ましい。

これが串本の夜空だ。串本の星空。私は意味もなくそう心でつぶやいて、こらえた。帰っても、まだ彼は寝ていた。覗き込むと口を開け、だらしない顔をしていびきをかいている。

仕方なく、私も少しソファに座ったまま仮眠することにした。

そして私が寝入る前に、佐伯がごそごそ起き出してきた。

「あ、目覚めましたか」

私が尋ねると、ひょいと頭を下げる。

「大丈夫ですか」

「ああ」

そう言ってぼうっとしている。私はもう少し彼が目覚めるのを待つことにした。

「あれから僕はただ玲美の失踪宣告のことばかりを考え、そのために生きてきた」

唐突に彼は語り始めた。

「彼女は死んだ。彼女は死んだ。もうこの世にはいない。もう二度と会うこともない。彼女は

死んだんだから。そう僕は思うことにした。もう彼女はいない。あれが終わりだったんだ。そう自分に言い聞かせた。しかし彼女は、葬儀もなければ墓もない。中途半端だ。僕には耐えられない。ならば、失踪宣告しかない、なんとしても、僕がこの手ではっきりと彼女の失踪を宣告して、彼女の死を宣告しないとイケない。僕がこの手で、絶対に、やり遂げなきゃイケない」

思いつめた激情が言葉にこもっていた。

「京都家裁で待った。僕は京都家裁で待った。そうしてようやく七年を迎えたが、申し立てはなかった」

彼は顔を上げ、私を見た。

「なかったんだよ。そうだ、彼女は申し立てすらしてもらえない。皆に忘れ去られ、池山は何もしてこない。彼女の死を自分の手ではっきりと宣言することができない。僕は絶望した」

打ちのめされた心情がひしひしと伝わった。

「もう生きる張り合いもなくなった。森村さんたちに送られて裁判所を退官したとき、僕の内心はそういうことだったんだよ」

「はい」

彼の静かな語り口に返した。

そうして沈黙する彼に私は尋ねた。

「佐伯さん、教えてください。どうして、佐伯さんが彼女の失踪宣告事件を担当しなければならなかったんですか」

彼は私の目を見つめると、問いを無視して口を開いた。

「森村さん、僕と彼女はもうずっと前に会っていたんです。玲美はまだ十一歳、僕は十六だった」

二人の物語の始まりを彼は語り始めた。

「僕はてっきり中学生だと思っていた。最初に彼女の方が僕を見て、手を振って合図してくれたんだ。」

僕は父が事業に失敗して母と車で死んだ後、叔父に引き取られた。よくしてくれたけれど、僕は息がつまって、友達のところに行く嘘をついて、あの夏一人で京都に出てきた。その最初の夜、僕は行くあてもなくて、四条大橋の近くの鴨川縁に座り込んでいた。近くに修学旅行の高校生の集団がいたから、少し安心してぼうっとしてたんだ。

和歌山から見たら、京都は大都会だ。人も多いし、夜になっても若者が多くて、この中にまぎれたら、一人で生きていける気がした。あいまいな気持ちで出てきたけれど、僕は京都の町が気に入って、もう叔父のところには帰らず、ここで働こう、なんてことを鴨川に映るきらきらした街の明かり見ながら一人で思っていた。

そのとき少し離れたところに一人で座っていたかわいい女の子が僕の方をちらちらと見ているのに気がついた。何度か目が合って、そして小さく彼女が手を振って合図してくれた。なんかお互いに一人ぼっちだと分かったから、安心したんだ。心通じた気がした。笑顔交わすと、二人同時に立って近寄って行った。近くで見ると、うわあと声上げたいほど、かわいかった。きらきらした目で僕を見て、何も言わずに川ぶち沿いを指差した。一緒に歩こうということだと分かった。

一人？と歩きながら僕は聞いた。一人だよ。君は？と彼女も僕に尋ねた。聞かなくてもお互いに帰るところはないとわかった。まだ中学生なのに帰る家もないなんてかわいそうだと、帰る家のない僕が思った。お金はあったから、それから二人で寺町のゲーセンで遊んだ。僕はクレーンに自信があったから、いいところを見せようと思ったけれどだめだった。それからいっしよにアイスを食べ、ミニスポゲートで思い切り身体を動かして遊んだ。楽しくて、夢中に

なって、二人で遊んだ。その日会ったばかりなのに、もうずっと一緒だった気がしていたし、僕は玲美がもう大好きになっていた。そして深夜になってもう店もほとんど閉まりはじめて、僕らは牛井屋に入った。入ってすぐにしまった、と思った。嫌な奴らがいた。相手は三人だし、僕らが入るとすぐにこっちを見ては何か大声で話しては笑い声上げている。どうしよう。玲美の前でかっこ悪いことはできないけれど、僕はまるで喧嘩をしたこともなかった。落ち着いた振りをして、並二つと店員に告げると、案の定奴らが声かけてきた。玲美が目当てなんだと僕は思った。玲美が小声で、出よう、と言って僕の腕を指で突いた。僕は小声で、注文した、だから出られないと答えた。答えた後で、かまうもんか、と思った。逃げよう、と僕は玲美に言った。玲美は、えっ？と驚いた。目を開いたその顔が、たまらないほどかわいかった。僕は彼女の腕をつかむと店を飛び出した。すぐに彼女も全力で駆け出して、手をつなぎ返して、二人で走って河原町に出た。夢中になっていたから気がつかなかったけれど、僕はともかく彼女は目立った。中学生なのにこんな夜に遊んでいる。やばいと思ったけれど、僕は町のことも全然わからない。そのとき初めて、僕は和歌山から一人で出てきたんだと玲美に告げた。だから京都の町を知らない。そうしたら彼女嬉しそうに僕の腕にしがみつくようにして、じゃあずっと一緒にいようって言った。玲美の胸が腕に当たって、僕はのぼせた。人がいるの

に、僕は興奮して玲美の細い身体を抱きしめて、キスをした。押し当てるだけの初めての」

それは彼の心の中で幾度となく繰り返し反芻した記憶なのだろう。彼はすらすらと物語を語るように語り続けた。

「彼女が、どうしよう、と聞くので、僕は意を決して、ホテルに行こう、ラブホテルなら見られないで入れるから大丈夫だ、と言った。もちろん入ったことはないから、大人ぶって知ったかぶりをしたのだけれど、もう夜の街には僕らの敵しかいない気がして、早く二人で安全な場所に逃げたかった」

少し視線を落として語る彼の顔は優しく、表情はきれいに見える。

「でもどこにラブホテルがあるのかわからない。知らない町だ。今みたいにスマホで調べられたいんだけど。途方にくれた。そしたら彼女が知ってる、と言うんだ。でも、すごく遠い。高速道路の出口のところだから地下鉄で近くまで行けると。でもこんな真夜中に地下鉄がまだ走ってるかどうかわからない。じゃあ、急ごうって、また手をつないで走り出した。彼女が、こっちって言いながら、僕の手を引っ張って笑う。僕も笑いながら走って息が切れる。大きなビルの横の階段を何回も下りて、四条駅に降りた。駅はサラリーマンやOLの人たちがいて、少し安心した。ちょうど最終電車に間に合ったんだ。僕らはきょうだいの振りをして、電

車の中ではいちゃいちゃせずにおとなしくしていたよ。

降りたのは竹田駅だと思う。途中、コンビニでお菓子やおにぎりを買い込んで、京都南インターの近くの『エンペラー』っていうホテルに入った。初めてだったけれど、うまいこと顔を見られずに、部屋に入れた」

彼はひと呼吸置いた。彼は十六歳の少年に戻っているのか。昨日の出来事のようなのだ。

「安心した。もう僕らを捕まえようとする大人たちもいない。コーラを開け、ポテトチップの袋を開いた。テレビをつけると、エロビデオが流れて二人で大声上げてはしゃいだ。そして彼女がいっしょにお風呂入ろうと言った。実は僕はずっと固くなっていて、それが恥ずかしくて、ドキドキしながらあとで入ると答えたんだ。

彼女はブラジャーでふくらみつけていたから、思っていたほど胸は大きくなかった。裸で二人ベッドに入った。僕は初めてだったから興奮して焦って、入りきらないまま射精した。僕は恥ずかしさとか何か罪悪感のようなものに襲われたけれど、彼女と裸の肌を合わせているとどんな幸福感に満たされてきた。玲美は本当にかわいかった。どんな芸能人よりもきれいだと思っただ。

それから二人で話をした。面白い友達の話やゲームの話。すると急に彼女は大嫌いな母親と

血のつながっていない父親の話をした。殺したい、と玲美は言った。僕はそのひと言で、その男から玲美が口で言えないほど酷い目にあっていることがわかった。僕もその男を殺してやりたいと思った。絶対に殺してやると思った。玲美とはすぐに思いが通じるから、僕が黙っていても、僕の気持ちをすごく喜んでくれた。僕はずっと玲美を守ってあげたいと思った。そして、僕は口にした。ずっと玲美の味方だから。玲美守ってやるからって。そして、玲美は泣き出した。『一緒にいてくれる?』と聞くから『死ぬまでれみのそばにいる』と僕は約束した。彼女は感動したように照れて、僕にれみと呼ばれるのがすごく気持ちいいと言う。でも、『たかひろ』と言う名は玲美の嫌いな男と同じだからあだ名はないのかと僕に聞く。僕にあだ名はなかったから、隆博を別な読み方したら『りゅうはく』だと玲美に言った。『りゅうはく! カッコいい!』って彼女は声上げて喜んで、『りゅうはく、りゅうはく』って繰り返した。僕も『れみ』って彼女を呼んで、二人抱き合って子犬のようにじゃれあった。そうしてもう一度試して、ようやく成功した。僕らは『れみ』『りゅうはく』と呼び合いながら、そのまま沈むように眠りに落ちた」

漆黒だった窓の外が、少し青みがかって少しだけ明るくなっているのに私は気づいた。

彼は異世界を漂流するように焦点の定まらない、それでいて目の奥が燃えている異様に強い

眼差して話にのめり込んでいた。

「そうして僕は朝になつても、ぐっすりと眠り込んでいたら、突然ドアをノックされて起こされた。そんなこと予想もせず、安心し切っていたから、僕は誰か部屋を間違えてノックしているんじゃないかと思つた。ノックを無視してベッドに起き上がったまましていると、玲美も目を覚ました。無視していても、いつまでもノックされる。玲美は、どうしたの？誰？と言つて怯えた顔をしている。二人とも全裸のままだ。僕は服を着た。ノックはまだ続いている。玲美に服を着た方がいいと声をかけ、僕は意を決してロックをはずしドアノブに手をかけ、少し開いた。ぐいと凄い力でドアが開き、背広の大人と女の人はずかずかと入つてきた。僕を押しつけ、大人たちはベッドの玲美のところに行くくと、女の人が『玲美ちゃん！』と叱るような声を上げた。玲美が怖がり、助けを求めるように僕を見た。僕が玲美のところに行こうとしたら、紺色の服の男が僕の腕をがつつかんだ。警官だった。『何するんや！』と僕が言つて振りほどこうとすると、『騒ぐな！』と一喝された。そして、僕は部屋の隅に引つ張つて行かれる間に、玲美が女に腕をつかまれベッドから引きずり下ろされ、泣き出した。『何するんや！離せ！』僕は暴れるが、警官に羽交い絞めにされ身動きもできない。玲美は『いや！いやあ！』と泣き叫んで暴れる。『いやあ！いやあ！帰さないでー！』泣きじゃくりながら悲鳴を上げ

た。僕も涙を流し、思い切り暴れ『こらあ、離せ！離せ！』と叫んだが、まったくかなわなかった。『いやあ、いやあ、りゆうはく！りゆうはく！』彼女は叫んでいた。『りゆうはく！りゆうはく！』彼女は廊下に連れ出されても叫んだ。僕は『ああ！ああ！』と吠えるように声を上げたが、玲美の声も聞こえなくなり、がっくりと力が抜けて、あとからあとから涙が溢れてきた。涙が止まらなかった」

しつかりと開いた彼の目から涙がひとすじ流れている。

「警察署にパトカーで連れて行かれ取調べを受けた。そこで、玲美がまだ十一歳の小学生で児童相談所の一時保護施設から抜け出して来ていたのだと聞いた。彼女とは、僕が司法修習のときに家裁で会うまで、二度と会えなかった。僕は警察に呼び出された叔父に連れられ、和歌山に帰った。僕は玲美のことは一日も忘れなかった。あの夜のことは一度も忘れない。僕の人生のすべてが始まった夜だ。僕は、闘うと心に誓った。そして弁護士になると決めて、必死に勉強した。しかし、所詮弁護士も民間人だ。権力の前にはひとたまりもない。大学のときに、裁判官になると決めた。玲美と会わなければまったく違うそしてくだらない人生だったと思う。玲美が僕の人生を決めた。そして、こんなことになった」

彼は精悍な表情をしていた。朝を迎えようとしている。

「明るくなってきましたね」

私は窓の外を見て言った。

「少しいいでしょうか」

佐伯は静かな表情で私の言葉を待った。私は語った。

「佐伯さんは自分の手で玲美さんの失踪宣告することに執着しておられた」

「執着じゃない」

「強く願っておられた。そして申し立てがないことに落胆されて、退官までされた」

「そうです」

「今、彼女の失踪宣告事件が申し立てられて、審理されている。佐伯さん自身の決定ではないにしても、玲美さんの死がそうして宣告されるかもしれない。そのことについては、どのようなお感じですか」

佐伯はじつとうつむいたまま沈黙した。

そして、

「僕は話したかったのです。全部。十六のときのこと、玲美との人生を全部、誰かに話しておきたかった。誰にも話したくない本当のことです。ずっと誰にも話さず、誰も知らない

まま、僕の心の中にだけあったのです。人がなんと言おうとこれが真実だ。本当のことを知っているのは僕だけだ。僕しか本当のことを知らない。ほかの奴が話すことなんて全部嘘だ」

彼は顔を伏したままそう言い放った。そうして、消え入りそうな声で言葉を継いだ。

「はじめて、こうして話すことができました。だから、僕はもう満足です。僕と玲美のことをあなたに全部話せたから。本当のことを。だから、しっかり報告書にまとめ、裁判官に記録として提出してください。これで真実がずっと残る。もう僕は思い残すことはない。これでいい。もうこれで終わりです。何もかも」

話し終わると、彼は暗くうなだれた。

「徹夜になってしまいました。体調は大丈夫ですか」

顔を上げ、にやりと彼は笑った。よくないのだなと、私は思った。

その朝のうちに、私は串本駅から特急電車に乗って、帰路についた。

三

京都に戻ると、私はすぐに詳細な佐伯との面接結果を記録して報告を裁判官に提出した。

「森村さんは佐伯君の陳述をどのように評価しますか」

部長は佐伯の面接内容について、まるで予測していたかのように、意外の感を抱いていないように見えた。ただ、どことなく不機嫌そうに見えた。

「事実なのかどうか、ということでしょうか」

「はい。調査官としてこの話をどのように受け止めましたか」

「私が事実だと評価するのは、面接で相手がなんらかの動機や意図をもって、そのような内容のことを私の前で述べた、という事実だけです。語られた内容が客観的な事実と言えるのかどうかについては、また別の問題です」

部長は黙っている。私は言葉を続けた。

「それが事実とは異なると本人が自覚しながら意図して虚偽を語ることもあります。大概本人が意図せずとも多少なりと事実を歪曲してしまうのが人の認知です。人の認知ほど危ういものはありません。その人の心の傾きに支配された感じ方受け止め方によって、平気で現実を歪めて認識します。ですから、たとえ傍から異様に見えたとしても、その人には嘘偽りなくそのように見え、そのように体験した、ということがあります。通常は他者の認知を受け入れることで自分自身の認知の歪みを修正しますが、その機会がなかったり、あるいは拒絶すると現実

と深刻なずれが生じ、傾きをますます増幅させてしまうこととなります。佐伯さんの陳述は、あまりに詳細過ぎて私にはむしろ現実感が乏しく感ぜられる部分もありましたが、佐伯さんにそう語らしめた切実な動機や心情があり、それはいったい何なんだろうと思いつながら聞いていました。今はそれ以上何も決めつけることはできない気がしています」

「なるほどね」

「部長はどのように感じられますか」

「うん。そもそも当時警察で受けた聴取に対して、平然と作り話を述べたと言っているだろ。それではもう、話を信用しろという方が無理でしょう。目を疑いましたよ。彼は裁判官だったわけですから」

「はい」

その通りだ。

「その彼しか不在者の自殺の瞬間を見ていないわけだし、ダムから遺体も上がっていないとなれば、その日を以って失踪の日と断定するのはためらいます。当時の不在者の生活の様子を含め、あまりにも情報不足です。佐伯君の話をもとに、調査を進めてください」

「わかりました」

部長はそのまま立ち上がりとはせず、すこしして私に尋ねた。

「さつきあなたが言った、佐伯君の切実な動機や意図。それはどのようなものと考えていますか」

「はい。発病のきっかけとかかわりがあるかもしれませんが、彼は何か具体的な強い不安と恐怖を抱いているような気がしました。それが何かはわかりませんが、何か認めたい現実に追い詰められているような、いつときも心が休まらない、不安に怯えているような印象を受けました。それを手放すと生きてはおれない何かを、私との対面で何か吐露してしまったのではないかと思います。だから、心配です」

私は正直に述べた。部長は黙ってうなずくと、私にただこう告げた。

「わかりました。引き続き調査をよろしくお願いします」

私は立ち上がり、頭を下げた。

気が重い。これから佐伯の語った物語をたどりひとつひとつ検証することになる。ただありのままの事実を明かしてゆくだけなのだが、とうてい晴れ晴れとした予感を持ちようがなかった。

私はまず二人の出会いをたどった。児童相談所から取り寄せた玲美の児童記録にはたしかに、小学五年生時に児童養護施設を出奔し無断外泊して保護されたという記載がある。当時玲美の担当をしていたケースワーカーが現在児童相談所の副所長となっていることがわかった。私は兎相に赴き、当時の話を直接聞くことにした。副所長の記憶は鮮明であった。

「施設を飛び出した矢部を誘拐してホテルに監禁した高校生は結局立件されず、警察署の訓戒で終えたと記憶しています」

副所長は佐伯と玲美の出会いを、誘拐監禁と述べた。

「佐伯隆博ですね」

「そういう名前でしたか。和歌山から家出てきた、たしか向こうの進学校の高校生です。前歴もないし、矢部の方が補導歴あったので、お目こぼしされたんですかね。おとなしい少年でした」

佐伯が、その朝部屋にずかずかと入ってきた兎相の女性と述べたのが副所長らしい。

「朝、警察の署員といっしょにホテルで玲美の身柄を保護されたんですね」

「ええ、覚えています。矢部は私たちが部屋に入ると、ほっとして私に抱きついてきました。怖かったんでしょう」

「保護されるまいと暴れた、ということはないのですか」

「ええ、静かなものでした。矢部からその男子高校生の悪口はなかったですね。玲美にすれば、行き場がなくて、仕方なくホテルについて行ったようです。ただセックスを強要されたことにはショックを受けていました。未遂なんですが」

「まだ小学生ですからね」

「私たちはむしろ強姦未遂か強制猥褻で立件してほしかつたくらいです。ひどいこと無理強いしてましたからね。悪質です。警察は、多分矢部の方から誘ったという男の言い分を信じたんですよ。たしかにませてましたから見かけは中学生くらいに見えましたけど、小学生ですよ。警察もどうかしていると腹が立ちましたよ」

「矢部はその少年のことを『りゅうはく』と呼んでいた記憶はありませんか」

「ありませんね。それはあだ名ですか」

「いえ、結構です。教護院を出てからは彼女からこちらに顔を出したり、連絡よこしたりということはなかったんですよか」

「なかったと思います。確か少年院から一度手紙が来ましたが、教官から指示されて書いたのでしょうか。教科書通りの中身のない手紙でした。家族がいないからこちらに出すほかなかった

んでしょね。寂しい話です」

「実は八年前に矢部が自殺したのではないかという話があって、その後の消息について家裁で調査しているんです」

「え？ わからないものですな。芯のある強いところのある子でしたから、保護環境さえ整ってれば、やって行けるのではと思っていたのですが、そうですか。もともと喧嘩が強い上に級生から空手の技教わって、男子相手でも敵なしでした。姉御肌で根性ありましたよ」

「そうでしたか」

「頭も悪くないんです。IQはたしか一一八かそこらあったと思います。でも全く勉強していませんから学校の成績は最悪でしたね。自己像が悪く、もろいところもありました。よくいる、惜しいタイプの子です。そうですね。残念ですね」

女子少年院を仮退院した後、玲美の生活を見守った女性保護司が、現在も奈良で現役だと分かった。私はそのお宅にうかがった。

もう腰の曲がった年配の婦人だ。玲美について尋ねると、しばらくあれこれと記憶をたぐり、ようやく玲美のことを思い出してくれた。いったん記憶がよみがえると、驚くほど詳細に

当時のエピソードが次々に語られた。保護司歴四十年と言うが、その驚異的な観察と記憶に驚嘆させられた。

「たちの悪い男につきまとわれておったさかい、玲美ちゃんのことずっと心配してましたんや」

誰のことか、すぐにわかった。

「なんかえらい賢い大学の先生かなんかで、ずっと玲美ちゃん嫌がった。不憫や。あんた玲美ちゃん十六のとき、その男と同棲してましたんや。ほたら子供妊娠してしても、男は玲美ちゃんポイ捨てしてとんずらや。えげつな。結婚するとかうまいこと言うて、面倒になったらこれや。玲美ちゃん、アホな男か荒くれもんしか知らなんだから、ころつといかれてしもたんや。それ、玲美ちゃんのあれや、トラマ。そない言うやろ。トラマ。可哀そうに。苦勞して、苦勞して、そうしてやっとこさ少年院出て生まれ変わる思てるときにや。男や。どこで嗅ぎつけたんか、あんた、またぞろ玲美ちゃんにつきまとってからに。踏んだり蹴ったりや。男が玲美ちゃんの泣き所や」

飾り気のないその語り口から、いかにも情の深い人柄がにじみ出ていた。小気味よく話は弾んだ。

「玲美さんは毎月こちらのお宅に報告に来ていましたか」

「月二回必ず来よりました。あの子は根が真面目やから、約束よう破らへん。せやから、雇う方に見てみたら、こないに当てになる子はおらん言うて大助かりや。賢いさかい覚えも早い。洗濯工場の坂本はんやら、あんたずいぶん玲美ちゃんに目えかけてくれはったんやで」

「ずいぶん皆さんに可愛がってもらってたんですね」

「うちら保護司の仕事は思い強う持ったらあかんとこもある。裏切られるのが仕事みたいなもんやさかい。せやけど、うちらかて人間や。しとうなくても肩入れしてまうんや。玲美ちゃん、もししゃんとした家の子に生まれてたらて思てみい。あないな親のところに生まれたのかあの子のせい違うやろ。そこのとこ言うてるんや」

「二号観察終わってからの玲美さんの生活ぶりはお存知ですか」

「あれつきりや。本退院なったら、もう逃げるみたいに奈良を出てってしもたさかいなあ。男や。言うたやろ。あの子の泣き所、男や。あないなえげつない目に遭うてるのに懲りひん。業やな。男と一緒に出てってそれつきりや。あんだけみなに世話になったのに、大事にせんならん相手がわからへん。最低や」

「それから一度も訪ねて来たり、連絡をくれたりしたことはないですか」

「いや、葉書はもろてたで。あの子忘れた頃に、ぼつん、ぼつんと年賀状くれはんねん。せやけど、もうずいぶんもろてへんなあ」

「どんなことが書いてありましたか」

「出てってから大分たって、病院にいてますて書いてありましたわ」

「入院されてたのですか」

「違う。勤めてはったんや。精神の病院で患者はんの世話してるんやて、白衣着て看護婦さんやらと仲よう一緒に写真映ってはった。なんや心配したんがあほみたいな、せやけどうれしかったでっせ」

「いつ頃ですか」

「さあ、もう何年前やろ。そのあと、結婚しましたいう葉書も貰いました」

「葉書はとってありますか」

「うーん、どこかにしまっただけあるんやないかと思うけど、さて見つかるやろか」

「すみません、見つかったらご連絡いただけませんか。最後に葉書が来たのは何年前か、とても大事なところなんです」

「どうやろ、見あたらんのと違うやろか」

「失踪宣告ってご存知ですか」

「はあ、行方不明の人を戸籍から消すんでっしやる」

「実は玲美さんが八年前から生死不明だということで、失踪宣告の申し立てが出てるんです」

「あら！　ほんま！　そら大変や。玲美ちゃん知ってる人にも尋ねてみますよってに。あらあー」

そう言って、大げさな身振りで協力を約してくれた。人によってはその圧を嫌がるだろうが、保護司だけでなく善良な人々に囲まれていたのであれば、玲美自身が何がしか人として魅力があったことの証左でもある。私は保護司が受け取ったという玲美からの年賀状についての連絡を心待ちにした。

そうして、いよいよ申立人池山修三との二度目の面接調査に私は向かった。主眼はなんとも奇妙な池山と玲美の夫婦関係であり、佐伯が語った池山による玲美との引き合わせについてだ。それを通して、雲をつかむようなこの事態の全容を、なんとしても手ごたえのある実像としてつかみ取った。

どことなく落ち着かない様子だった前回とは打って変わり、なんともリラックスし慣れた様

子で池山はあらわれた。

「池山さんは、玲美さんとどういいういきさつでご結婚されたのですか」

「へえ、わしの親父が前に入ってた老人ホームに玲美がおりまして、親父の面倒をみてくれてたんですわ」

「はい。ホームでお知り合いになって、それから交際されて」

「いえいえ、交際なんかしてまへん」

「ではどういいうことでご結婚を」

「どういいうことで、言われても」

「池山さんご自身はどういいうお気持ちで結婚を決心されたのですか」

「決心なんかしてへん。なんか、知らん間に結婚してたんや」

「式とか旅行とか」

「してへん、してへん」

「戸籍だと、平成一八年、玲美さんが姿を消す前の年に婚姻届が出されていますが、その頃から同居されたのですか」

「同居なんてしてへん」

「婚姻の実体はないんですね」

「あらしまへん」

驚いた。どういうことだ。

「婚姻の届は玲美さんが出されたんですね」

「へえ、そう言うてました」

「希望してなかったということでしょうか」

「いや、玲美はべっぴんやし、氣立てもええし働き者や。わしにはもったいない。それになんも迷惑かけへん言うて頼むさかい」

なんということだ。

「形だけの、法律上だけの夫婦だったということですね」

「あきまへんのか。玲美が大丈夫やいうさかい」

まるでいたずらがばれた子供のようにはつ悪そうに愛想笑いを浮かべている。私は言葉に窮した。

「経済上も共同はなかったのですか」

「へえ」

「肉体関係も」

「いや、それは一度だけさせてもらいました。お礼や、言うて」

「お礼」

「なんか、初夜みたいに格式張って、こんなん引き受けてくれるの池山さんしかおらんで、池山さんおおきに、池山さんありがと言うてあんまりありがたがるさかい、こっちの方が恐縮してしても、なんか妙に白けて全然盛り上がりたらんとあっさり終わってしもた。その一回ぽつきり」

「ということは、池山さんでなくても」

「誰でもよかったん違いますか」

それは結婚とは言わない。夫婦とは言えない。

「そのときはもう今の奥さんとは」

「いやいや、嫁と知り合うてたら、そんなん承知しまへん。その半年後やったかな、嫁と知り合うて、嫁んとこ転がり込んだんですわ。そのあと困ったなあと思うたけど、もう戸籍入ってしもとる者、今さら消せしませんやろ。嫁もせやったらしゃないなあ言うてくれて、そのままですわ」

なんとも糠に釘打つように力の抜ける話だ。それにしても、どうしてなのだ。

「玲美さんは、なんでそこまでして、形だけでも誰かと結婚しようと思ったんでしょうか」

「わかりまへん」

なぜだ。なんのためにアリバイのような結婚を欲したのか。私は疑問を心に置いたまま、話題を転じた。

「玲美さんが自殺されたという一週間ほど前に、玲美さんと男性を引き合わせてはおられませんか」

きよとんとして首を振る池山。

「佐伯さんという男性をご存知ではありませんか。玲美さんと最後まで一緒におられた方なんです。池山さんと玲美さんと三人で喫茶店で会ったとおっしゃっているんです」

首を傾げ、しばらく考え込んでいる。

「あ、せや。思い出した。会ってますわ」

「そのときのこと、話していただけますか」

すると池山は、困ったという顔をして口をつぐみ、そして押し黙ってしまった。

「話しにくいですか」

私の顔をちらと覗いてから、小声で独り言ちる。

「結局もろてへんにやし、大丈夫やな」

自分にそう言い聞かすようにして、ゆっくりと語り始めた。

「おかしな話ですわ。いきなし電話かかってきて、お前玲美と結婚してる言うんはほんまか、言いよるんですわ。藪から棒に。偉そうな言い方や。そんでわし、かつちーん来て、お前誰や、玲美はわしの嫁や、わしを誰や思てるんじゃ！ 言うて、かましたったんですわ。わし、普段はそんな威勢のいいこと言わしまへん。電話や。こっちの顔見られへんさかい、ガラ悪う怒鳴ったったんですわ。そしたら急にしおらしい声になって、玲美と会わせたってくれ言い出したんですわ。こっちは引つ込みつかんさかい、なめとんか、こら！ とか言うて、もう泣き声ですわ。一度でいいから会わせたってくれ。会わせたってくれの一点張りで、なんちゆうきしよいやっちゃ思て、こっちの方が根負けしたんですわ」

「佐伯さんの方から電話があったんですね」

「へえ」

「間違ありませんね」

「間違いおまへん」

会ったのは事実らしい。

「それで玲美さんと三人でお会いになったんですね」

「たしか、わしから玲美に電話して頼んだんや。電話番号だけは知っとったさかい。二人で会わそとしたら、三人やないと嫌や。男に結婚してるいうことを見せなあかんとかあいつが言うんや。そんで、三人で会うたな」

そういうことだったのか。そのためだったのか。合点がいった。

「それが、ダムで玲美さんが亡くなる一週間程前ですね」

「ほやな」

「お会いして、どういう話に」

「男は高そな背広着た、固い仕事してそうなきしよい奴でしたわ。わしのこと最初からびびつとる。人見る目ないアホや。わしがただのヘタレや言うのは一目見たらわかるがな。信じられへんやろ。せやから、わし意気って、ガラ悪うしてたんや、おかしいやろ」

愉快そうに笑っている。私もつられてにこりとした。たしかに彼を怖れるのはどうかして
る。そして彼は当時現職の裁判官だ。

「それで？」

「玲美と二人で話させてくれ言うから、わし席を移ってカウンターでマスターと話してたんや。せや、その日のレースの話してたんちがうかな、お馬さんの」

「玲美さんと男性はどういう話をしたんでしよう」

「聞いてへんな。話済んだいうから席に戻ったら、玲美めっちゃ嫌そうな顔してたから、ほんまに男と会うの嫌やってんなあ、会わせてすまんかったなあとちよつとわしも責任感じて、おら、なめんな！ とかなんとか言うたったんや。」

そしたら、そうや男が急に床に這いつくばって、土下座したんや。たまげて、こいつ、気でも違ったんやないかと思つて、玲美見たら、玲美も目え丸くして、なんかもうんざりしたよくな顔してたな。そんで、とんでもないこと言い出したんや。今までのこと許したつてくれ。もうこれで最後にする。やから最後に一度だけ付き合ってくれ、とかなんとか言うて、泣き出すんですわ。

びっくりして店におった人みんな見てるがな。なんや、ほんまにわしが脅してるみたいや。こらあかんと思つて、わし抱き起してそいつを席に座らせたんや。男は泣きながらわしにしがみついて『ご主人、ご主人、百万、いや二百出す。ご主人、お願いします』言うんや。こいつほんまに狂つとる、薄気味悪うなつて、わかつたわかつた言うて、なだめたんですわ」

「二百万払うと言ったんですか」

「へえ。ほんまに。あほな、と思えますがな。そしたら、玲美がなんか凄い顔して『足りんわ。慰謝料三百万はろて！』とか言い出すもんやさかい、わしもう仰天して、もう付き合い切れんわ、て、もうええもうええ言うて切り上げたんすわ」

「結局二人は会うことになったんですか」

「知らん。わしもう関わり合いになるのかなんさかい、なんも聞かしません。耳ふさいでました」

そう言うってから、はたと何かに気がついたようで、池山は私の顔を見つめ口を開いた。

「ほしたら、ダムに二人で行ったんですか。玲美は嫌がってたけど、男の方はものすご玲美に入れ揚げて惚れぬいてるようやった。先生、もしかして、男はストーカーやったん違うやろか。うわ！ あかんわ！」

今さらのように分かりやすくおののいて、こう口走った。

「玲美、あいつに殺されたんちがうやろか」

その翌日、佐伯が自宅で首を吊って絶命したと訃報が届いた。

前後して、件の保護司から玲美の年賀状のコピーが郵送で届いた。いずれも失踪前のものであったが、失踪当時玲美が勤務していた介護施設が判った。

老人保健施設堅田レークサイドはその名の通り琵琶湖畔に建つ古い介護施設だ。入所者の九割は認知症の老人で、彼女は介護福祉士としてその施設に六年間に亘り勤務している。その経歴を知り、国家資格を取得し、身体的にも精神的にもハードワークと言われるその職責を彼女が長年にわたり全うしていたことは驚きだった。改めて、佐伯が語った玲美の人格像との甚だしい乖離に内心啞然とする思いであった。

同い年で玲美ととても親しくしていたというナースに会うことができた。面会室で向かい合ったナースは、当初露骨に私を警戒し心を閉ざしていた。裁判所から来た人間だからだ。しかしそれは、むしろ玲美を庇おうとする心情ゆえと思われた。私は先に、玲美に対して失踪宣告の申し立てが出ていることを説明した。

「玲美は死んでません」

それが第一声だ。彼女はダムから逃れてきた玲美とその夜に会っていたのだ。

私はすぐに言葉が出なかった。やっぱり、やっぱりと心は繰り返しつぶやき、深い安堵が心に染みるように広がるのを感じ、そして力の抜ける思いがしていた。自覚していた以上に、実

は佐伯の死が堪えていた。

彼女が語ってくれた話はこうだ。あの日、ダムへと連れ去られてきた玲美は、佐伯がはじめから玲美を殺害するつもりだと察知し、無理心中を図る佐伯に必死で抵抗したのだという。憎しみに駆られ狂気の形相でダムの柵に押しつける佐伯に対して、このままでは到底男の力には適わないと見るや玲美は咄嗟に、なんと佐伯の目を突いて、思い切り金的蹴りを見舞ってしまったというのだ。手すりをつかんで目を抑えてうずくまる佐伯を見下ろすと、玲美は叫ぶように思いのたけをぶちまけた。そして泣き出した佐伯に向かい、そんなに私を殺したいなら死んであげる、私は今日死んだの、私はもう死んだのと絶叫し、靴が脱げたまま後ろも見ずに雨中を走って逃げだしたのだという。

想像もしなかったダム上の修羅場だ。玲美は、その夜ナースのアパートに泊まり、翌朝新幹線で九州に旅立ったのだという。

以後、玲美からの連絡は一切ないという。それから彼女は住民票も戸籍も触れず、行方不明者として生活したことになる。こうした失踪者が生き延びることは男性に比して女性にとって格段に過酷になる。事情を知り守ってくれる存在が不可欠であるが、その境遇を同情でなく利用し搾取され、ときに抹殺されることも少なくない。それでもナースは玲美が必ず元気に今も

過ごしていると楽観的に確信していた。

最後の夜に、玲美とナースは一晩中語り明かしている。それは突然に訪れた二人きりの送別会であった。玲美ほどではないが、ナースも苛烈な人生をくぐり抜けてきたらしかった。もう四十歳をとうに超えているのに、家裁と聞いただけでまだ反感が湧くと屈託なく笑う。そして佐伯に憎しみに近い猛烈な反感や嫌悪を抱いているのは、なにがしかナース自身の過去に男との苦しみがあるのかもしれないと私は思った。彼女はしきりに、玲美はもつと前に佐伯の金玉蹴飛ばしとけばよかったのにと軽口を叩いたが、それは事態の深刻さを思い知っていることをひた隠すカモフラージュにも感じた。他人を決して寄せつけないサバイバー同士秘密の共感が二人の間にあるのではないか。そして何より佐伯は裁判官だ。この社会の中で佐伯が保持する強大な権力に比して、気が遠くなるほど非力で無力なその立場を我がことのように呪ったことだろう。裁判所から来た私をひどく警戒したのも合点がいった。

私は彼女に、どうして玲美が今でも元気できると確信できるのか、尋ねてみた。

「わかりますよ。ツイッターでフォローしてくれてる変な女、こっちからは聞かないけど、玲美です。違ったとしても、必ずどこかの病棟か施設で、ジジイの失便ていねいに拭いてますね。ほんまきつたないわ！ とか言いながら」

言葉と裏腹にとてもすつきりとしてきれいな表情だ。

「あの子が助手のときは夜勤助かったし、面白いこともあったからね」

「今でも介護の仕事されてますかね」

「してる」

それは希望や推測以上の裏打ちされた事実の響きがあった。

「お会いしたいでしょう」

「あの子から連絡してくることは多分ないと思うけど、死ぬまでにどこかで会えるんちがうかなあ。ばったり日本のどっかで会えたら面白いね」

私も笑ってうなずいた。私は、彼女が実は玲美と今でも連絡を取り合っていると確信した。

私にさえ決してそれを明かさないと、その警戒心がきつと玲美を守ってきたのだ。

私は、佐伯がすでに死亡したことをナースに告げた。彼女ははっとして目を丸くして、返事もできず、ただ呆然として私を見つめた。

「もし玲美さんから連絡あれば、もう隠れて生きることはないと知らせてください」

彼女は私をまっすぐに見つめ、そしてゆっくりとうなずいた。息を呑み、その目は潤みを帯びていた。私はふと、玲美自身と向かい合っている錯覚さえ覚えた。

湖辺を走る湖西電車の駅に立ち、私は京都へ帰る電車を待った。佐伯は玲美の殺害に失敗し、そして法的に存在を抹殺する計略さえ破綻した。自死は当然の末路にも思える。彼にすれば、ダムで果たすはずだった自身への断罪をようやく決着つけたということだったのか。いずれにせよ、彼にとっての「真実」を私に語ったことで、その破綻を自ら引き寄せたことは間違いない。覚悟の上だったのだろう。困いのないむき出しの高架駅に季節外れの比良おろしが強く吹いた。思わず風をかわし、私は身体を琵琶湖に向けた。そこには遠く湖面が広がり、暗い雲のすき間からわずかな陽光がおぼろげにのぞいていた。

数日後、私は一連の調査結果を先に口頭で報告した。部長はうなずき、ただ短く、わかった、とだけ答えた。

玲美が旅立つ直前に京都駅近くの銀行窓口で預金を全額引き出したというナースの記憶から、彼女の銀行口座がわかった。今でも口座は生き、九州の銀行支店で定期的に入出金が続いていた。また、佐伯が振り込んだらしい三百万も記録に残っていた。

こうして不在者池山玲美が平成一九年一月五日ダムに入水し死亡したという申立要件は見事に覆された。

別途離婚訴訟を提起すれば、離婚成立が見込まれることを伝えると、池山は申し立てを取り下げた。それを以ってこの失踪宣告事件は終結した。

そしてしばらくのちに件のナースから、玲美と連絡がつき、佐伯はもうこの世にいないと確かに伝えたと言った。

事実の調査が家裁調査官の職分という。しかし事実とはなんだろう。いったい何が明かされたというのだろう。

加茂川べり出町三角州の土手に、曼殊沙華が鮮やかな朱色を並べていた。昼休みに近くの枡形商店街へと出かけていた私は、葵橋の上でその鮮烈な花群れに目を奪われた。欄干に手をついて、その痛ましく飛び散った血のような群生を眺めていると、一本の曼殊沙華が大きくゆらりと揺れた。あ、と私は思った。両手を前に組み静かにうなだれて立つように、やがてその花茎はゆっくりと揺れをとどめた。私は欄干から手を放すと、その土手の背後に、何も言うことはないと言いたげにただ黙ってその深緑をたたえている糺ノ森を、しばらくずっと橋の上から眺めていた。